

愛知県東海市

きたひろ
北広遺跡発掘調査報告

2019年

愛知県東海市教育委員会

愛知県東海市

きたひろ
北広遺跡発掘調査報告

2019年

愛知県東海市教育委員会

序

愛知県東海市は、知多半島の付け根、伊勢湾の東岸に面しています。

この地ははるか古代から交通の結節点として意識されており、古くは万葉集に歌われたあゆち湯として知られるように、旅人が行き交い、現在は伊勢湾岸自動車道が通り、交通・物流の拠点として発展してきました。

そして、近年本市では名古屋鉄道太田川駅周辺を初めとして、様々な開発事業が進められ、急速に本市の姿が変わりつつあります。

今回の報告書で報告する北広遺跡周辺は、土地改良事業が進められています。調査では数多くの中世の柱穴などが見つかっており、周辺の中世城館である木田城との関連も指摘されるところです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成31年（2019年）3月

愛知県東海市教育委員会
教育長 加藤千博

例　　言

- 1 本書は愛知県東海市宮木島町に所在する北広（きたひろ）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、文化庁より平成30年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（事業名称：東海市市内遺跡発掘調査等）の交付を受けて実施したものである。
- 3 本調査は、北広遺跡の詳細な範囲確認を目的として、東海市教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体 東海市教育委員会
調査事務局 東海市教育委員会社会教育課
調査担当 東海市教育委員会社会教育課　主任 宮澤浩司
調査支援 国際文化財株式会社 中部支店

- 4 本事業は、現地での発掘調査を平成30年1月18日から2月19日まで実施した。一次整理作業以降の作業については国際文化財株式会社中部支店東海市整理事務所において実施し、本書の刊行をもって終了した。
- 5 現地調査は宮澤が担当し、国際文化財株式会社中部調査室調査員江藤淳（調査補助員）、管理技師多田和幸（測量）、管理技師仁田剛（施工管理）の調査支援を受けて実施した。
- 6 二次整理作業は宮澤が担当し、作業については国際文化財株式会社中部調査室主任技師上田誠人、同花井晶子の支援を受けた。
- 7 調査の実施にあたっては、木本北部土地改良組合、愛知県教育委員会及び東海市環境経済部農務課等の関係各位の御協力を賜った。
- 8 本書の編集・執筆は宮澤が行った。図版作成については国際文化財株式会社中部支店の支援を受けた。
- 9 調査及び報告書作成にあたっては、中野晴久氏（愛知学院大学講師）、小栗康寛氏（とこなめ陶の森資料館学芸員）、坂野俊哉氏（知多古文化研究会）、の各氏に御指導・御協力を賜った。ここに記して御礼申し上げる次第である。
- 10 現地調査は鳴倉浩一、荻原康裕、島哲司、野田米藏、木村誠伸、小川康太郎、磯村江美子、磯村孝弘、中野真知子、平野武光、平野光男、平松正春、藤井恭彦、高奥正暁、鈴木淳子らの尽力によりなし得たものである（順不同、敬称略）。
- 11 出土遺物の実測・探拓及びデジタルトレースは坂野俊哉氏、加藤豊子氏の協力を得た。
- 12 出土遺物の写真撮影は上田が行った。
- 13 今回の調査の出土遺物、作成した図面及び写真等の記録・資料は全て東海市教育委員会において保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した座標は、国土交通省告示に定められた国土座標である、平面直角座標第VII系に準拠し、世界測地系にて表記している。方位は座標北を示す。標高は東京湾平均海面高度（T.P.）を使用した。
- 2 遺構の種別番号は『発掘調査のてびき』文化庁文化財部記念物課編 2010 に従った。以下にその主なものを示す。

SK= 土坑 SP= 柱穴・ピット SD=溝 SB=建物 SX= その他不明遺構
- 3 土層の土色については『新版標準土色帖』(2007年版) 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
- 4 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。
- 5 参考文献目録は巻末に一括して掲載した。

目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の経緯.....	1
第1節 調査に至る経緯と経過.....	1
第2章 遺跡の位置と環境.....	3
第1節 遺跡の位置と地理的・歴史的環境.....	3
第3章 調査の方法.....	6
第1節 発掘調査の方法と基本層序.....	6
第2節 調査経過.....	8
第4章 I区の調査.....	10
第1節 遺構	10
第2節 遺物	17
第5章 II区の調査	18
第1節 遺構	18
第2節 遺物	26
第6章 統括	34
第1節 調査成果	34
第2節 まとめ	35
参考文献	
遺構一覧表	
遺物観察表	
写真図版	

挿図目次

第1図 北広遺跡の位置	1	第14図 II区平面図	19
第2図 北広遺跡想定範囲図	2	第15図 II区断面図	20
第3図 周辺の遺跡と地形	3	第16図 027SD 平面図・断面図	22
第4図 周辺主要遺跡分布図	4	第17図 028SX、029SP、030SP、031SP、031SK、 032SP、033SP 平面図・断面図	23
第5図 調査区配置図	7	第18図 036SP、040SP、046SP、047SP 平面図・断面図	25
第6図 I区平面図	11	第19図 084SP、088SP、089SP、100SP 平面図・断面図	27
第7図 I区北壁断面図	12	第20図 102SP、104SP、116SP、137SP、 150SP 平面断面図	28
第8図 I区西壁・北壁セクション図	13	第21図 II区出土遺物(1)	30
第9図 015SK 平面図・断面図	14	第22図 II区出土遺物(2)	31
第10図 019SK 平面図・断面図	14	第23図 II区出土遺物(3)	32
第11図 017SP-013SP-010SP-024SP 平面・エレ ベーション図	15	第24図 II区出土遺物(4)	33
第12図 016SP-014SP-008SP、 023SP-007SP-014SP-013SP 平面・エレベーション図	16	第25図 北広遺跡と木田城	37
第13図 I区出土遺物	17		

写真目次

写真1 I区基本層序	7	写真2 II区基本層序	7
------------	---	-------------	---

写真図版目次

写真図版 1	I区 完掘全景 南西から	写真図版 6	II区 完掘状況 北から
	I区 完掘全景 北西から		II区 完掘状況 南東から
	I区 北壁断面 南東から		II区 完掘状況 南から
写真図版 2	東TR 断面状況(西面) 南東から	写真図版 7	II区 南壁断面状況 北西から
	001SP 完掘状況 南から		040SK 完掘状況 東から
	001SP 遺物出土状況		102SP 完掘状況 東から
	№002・003 東から	写真図版 8	036SP 完掘状況 南から
写真図版 3	027SD 断面状況 南から		046SP 完掘状況 南から
	027SD d006 出土状況 北から		047SP 完掘状況 南から
	028SX 断面状況 南から	写真図版 9	150・151SP 完掘状況 南から
写真図版 4	088SP 断面状況 南から		120SP 完掘状況 南から
	047SP 遺物出土状況 東から		089SP 完掘状況 東から
	050SP 遺物出土状況 東から	写真図版 10	087・088・152SP 完掘状況 東から
写真図版 5	116SP 遺物出土状況 西から		
	150SP 遺物出土状況		
	d019 北から		
	I区 建物跡 完掘状況 東から		

写真図版 11	1 001SP 出土 広口壺 (1)	写真図版 13	13 116SP 出土 山皿 (23)
	2 包含層出土 石鍋 (2)		14 150SP 出土 山皿 (24)
	3 028SX 出土 山茶碗 (4)		15 遺構外出土 山皿 (26)
	4 079SP 出土 山茶碗 (9)		16 遺構外出土 山皿 (27)
	5 084SP 出土 山茶碗 (12)		17 遺構外出土 山皿 (28)
	6 106SP 出土 山茶碗 (13)		18 104SP 出土 短頸壺 (30)
写真図版 12	7 遺構外出土 山茶碗 (15)	写真図版 14	19 027SD 底面出土 壺 (31)
	8 036SP 出土 山皿 (17)		20 100SP 出土 丸瓦 (36)
	9 095SP 出土 山皿 (18)		21 遺構外出土 伊勢型鍋 (38)
	10 028SX 出土 山皿 (19)		22 150SP 出土 白磁碗 (39)
	11 028SX 出土 山皿 (20)		23 遺構外出土 不明 (青磁) (40)
	12 093SP 出土 山皿 (耳皿?) (21)		

第1章 調査の経緯

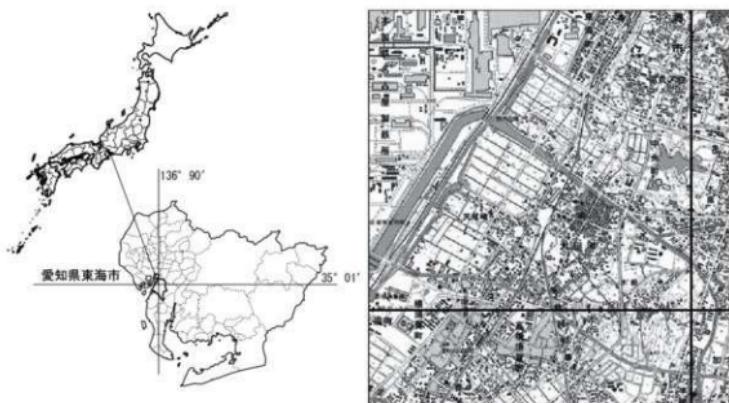
第1節 調査に至る経緯と経過

北広遺跡は愛知県東海市富木島町北広、東広地内に位置する（第1図）。平成11年に刊行された『知多半島詳細遺跡分布調査報告書』によると、遺跡の時期が中世の遺物散布地であり、分布調査の際に山茶碗や甕、鉢が採集されている。遺跡の現況は畑地であり、丘陵上の畑に遺物が広く散布しているとの記載がある。

東海市では、近年北広遺跡を含む本田地区北部において、土地改良事業の計画が持ち上がり、事業計画区域内に北広遺跡が所在することから、今後の遺跡の取り扱いについて検討する上で、遺跡の性格とその範囲について、課題となった。このため平成26年3月に現地踏査を行い、遺物の散布状況の把握につとめたが、山茶碗の小片を中心とした遺物の散布状況は散漫であり、現地踏査のみでは遺跡の範囲は不明瞭な状況であった。その後、土地改良事業の担当課である環境経済部農務課と調整を進めた結果、遺跡の範囲及び遺跡の残存状況等について、範囲確認調査を実施して確認することとなり、平成27年度に範囲確認調査を実施した。確認調査の結果、これまで知られていた北広遺跡の範囲よりも遺構・遺物が出土した範囲は限定されたことが明らかとなった（第2図）。

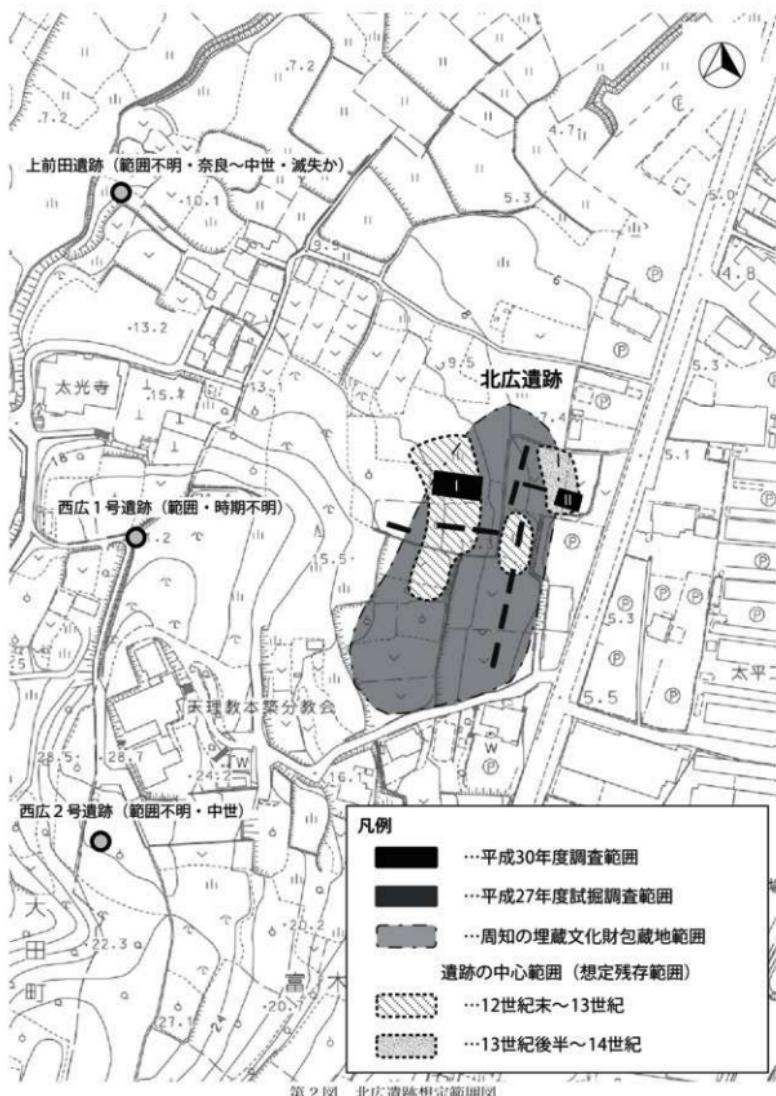
範囲確認調査の成果を受けて、施行者である本田北部土地改良組合及び環境経済部農務課と協議の結果、農道として削平される部分について本発掘調査を実施することとなった。このため、平成29年度に文化庁より平成29年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（事業名称：東海市市内遺跡発掘調査等）の交付を受けて北広遺跡発掘調査を実施するに至った。

調査に際しては、現地調査及び1次整理作業について、平成29年12月26日に国際文化財株式会社中部支店と調査支援業務委託契約を締結し、調査支援を受けた。現地調査は平成30年1月18日から開始し、1区から順に調査し、2月19日に現地調査を終了した。



第1図 北広遺跡の位置

2次整理作業及び報告書作成作業については、2次整理作業と図版作成作業について、平成30年6月22日に国際文化財株式会社中部支店と報告書原稿作成支援業務委託契約を締結し、業務支援を受け本書の刊行に至ったものである。



第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

北広遺跡は、知多半島北部に位置し、伊勢湾に面した東海市大田町の丘陵上に位置している。知多半島はその地理的特徴として半島中央部に背骨のように丘陵が南北方向に存在し、半島の東西両側の臨海部には段丘や小規模な沖積平野が広がっている。北広遺跡が所在する丘陵は、大田川によって開析された谷状の地形によって丘陵が南北に切り離されたことにより形成された、南から伸びる舌状の丘陵である。地元では丘陵上に展開する本田地区があることから、この丘陵を本田の丘陵と呼んでいる。本書でも便宜的に本田の丘陵と呼称する。

この本田の丘陵の地質は粘土と砂の互層を中心として構成される、いわゆる常滑層群からなり、第三紀中新世～鮮新世に形成されたとされる。丘陵が土取などで削り取られた箇所では、いわゆる山土と呼ばれる粘土が観察できるが、砂層が観察できる箇所もある。

北広遺跡はこの本田の丘陵の東側に位置し、大田川に向って緩やかに傾斜する東向きの緩斜面上にある。そして、大田川によって開析された谷から海岸にかけては、知多半島でも有数の広さを持つ海岸平地であり、平地上には砂堆と呼ばれる浜堤状の砂の高まりが南北に延びて形成されている。砂堆とは、本市における海岸平地の形成を考える上で重要な地形的要因である。大田の海岸平



第3図 周辺の遺跡と地形

地に砂堆が形成されたのは、砂堆上に展開する遺跡の調査成果等から、縄文時代後期頃であるとみられ、最も内陸側の砂堆から順次形成されていったと考えられている。

この砂堆の形成には、伊勢湾の地形と、そこに流入する河川が深く関わっていると考えられている。縄文海進によって現在の海水平よりもはるかに上昇していた縄文時代の海岸線は、地球規模の寒冷化によって、次第に現在の海水平に近づいていった。海水準の低下により、海岸平地には伊勢湾に流入する木曾川や庄内川といった河川から供給される砂が、湾内の水流によって吹き寄せられるように堆積し、砂層となって陸地化していくことで形成されたのが砂堆である。こうして形成された砂堆は、海岸線に沿って細長く伸び、砂の堆積が進むことで複数条形成された。大田の海岸平地では3条の砂堆が確認できる。

この大田地区に先人達の生活の跡が見られるようになるのは、縄文時代前期からである。本田の丘陵中腹の北側斜面に所在する高ノ御前遺跡は、市内で最古の縄文土器が出土した遺跡であり、縄文前期以降晩期に至るまで長期にわたって存続した遺跡であることが分かっている。住居址等の遺構は確認されていないものの、市内では数少ない縄文時代の遺跡であり、大田の海岸平地に砂堆が形成される以前の海岸を臨む場所に位置している。その後、砂堆の形成とともに海岸平地の陸地化によって、海岸平地上に遺跡が展開していく。烟間遺跡及び東畠遺跡はその海岸平地上の砂堆に展開した弥生時代から近世までの大規模な集落遺跡である。同遺跡では土地区画整理事業とともに発掘調査が実施されており、弥生時代中期後葉を中心とした時期と、古墳時代前期を中心とした時期の遺構を数多く確認している。その後は同じ砂堆上に連続と集落が営まれているが、中世以降



- | | | | | |
|------------|------------|-----------|--------------|-----------|
| 1 北広遺跡 | 6 後田遺跡 | 11 龍雲院遺跡 | 16 横須賀御殿跡 | 21 山畠遺跡 |
| 2 丸根古墳（滅失） | 7 神宮前遺跡 | 12 煙間遺跡 | 17 烏帽子遺跡 | 22 西広1号遺跡 |
| 3 松崎遺跡 | 8 王塚古墳（滅失） | 13 東畠遺跡 | 18 太田川第3踏切貝塚 | 23 西広2号遺跡 |
| 4 上浜田遺跡 | 9 下浜田遺跡 | 14 高ノ御前遺跡 | 19 木田遺跡 | 24 大木之本遺跡 |
| 5 弥勒寺遺跡 | 10 郷中遺跡 | 15 前畠遺跡 | 20 木田城跡 | 25 岩屋口古墳 |

第4図 周辺主要遺跡分布図

大規模な開発があったようで、砂堆上の広範囲に生活の痕跡が残されるようになる。そして本田の丘陵上には、中世城館である本田城が築かれ、戦国期以前は在郷の豪族である荒尾氏の支配下にあり、本田の丘陵と尾根でつながった小丘陵上には知多半島有数の古刹である雨尾山觀福寺（天台宗）が所在している。

今回報告する北広遺跡周辺は、先述の高ノ御前遺跡が所在する本田の丘陵の東側斜面にあたる。北西側には高ノ御前遺跡に続く丘陵の稜線上に前畠遺跡（縄文～弥生・中世）が所在し、丘陵頂部には本田遺跡（弥生・中世・滅失）や山畠遺跡（中世～近世）が所在する。北広遺跡は高ノ御前遺跡らが位置する舌状地形とは緩やかな谷を挟んで位置している。北広遺跡が位置する斜面頂部には西広1号遺跡（時期不明）、西広2号遺跡（中世）が所在する。中世の時点ではこの本田の丘陵には本田城があつたことが分かっており、北広遺跡を含め、これら中世段階の遺跡については、本田城に関連する可能性がある。なお、本田城跡については、発掘調査等は行われておらず、主郭部分を含めて広範囲が宅地にあたるため、城全体の様相はよく分かっていない。

なお、中世以降、近代に至るまで北広遺跡周辺は大きな地形改変は加えられていないようである。ただし、昭和20年以降、柑橘類の栽培のために開墾され、現在見られる段々畑状の地形が形成されている。

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法と基本層序

発掘調査区の設定にあたっては、平成27年度に実施した詳細確認調査成果を踏まえ、土地改良事業における道路予定地のうち、遺構・遺物の出土が予想される範囲2箇所を調査区として設定し、西側調査区をI区、東側調査区をII区とした（図4）。I区は約20m×約10mの調査区で調査対象面積は約200m²、II区は約10m×約8mの調査区で調査対象面積は70m²である。また、調査区および調査用グリッドについては、愛知県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル』に準拠して設定した。具体的には国土座標の平面直角座標系（世界測地系）第VII系の座標に基づき、座標X軸を座標系原点の子午線に一致する軸とし、Y軸をX軸に直交する軸とし、座標系原点からX軸は真北へ、Y軸は東へ向かう値を正とする。これに基づいて1km×1kmの大グリッドを設定し、大グリッド内に100m×100mの中グリッドを設定し、更に中グリッド内に5m×5mの小グリッドを設定した。

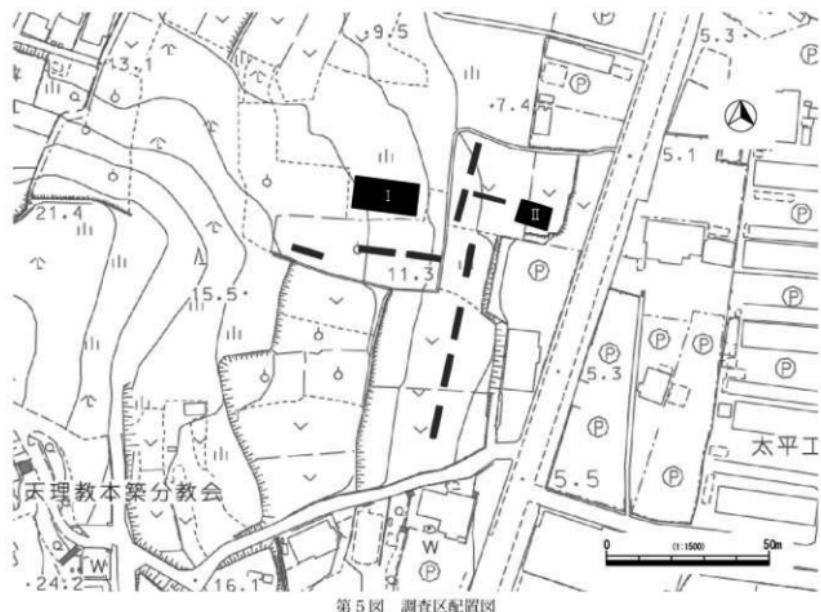
実際の発掘調査は、調査区内に繁茂する高さ1m程の下草を動力除草機で刈った後、調査区を設定し、重機を用いて表土及び攪乱土を除去した後に、人力にて包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。

掘削にあたっては、設定した調査グリッドの最小単位である5mグリッドを取り上げの基本単位として出土遺物を取り上げ、重要遺物や特定の遺物については地点上げ遺物として取り扱い、d-01から番号を付与し、出土地点及び標高をトータルステーションによって測量・記録した後に取り上げた。調査区断面図は各調査区の長辺を基本として作成し、必要に応じて調査区短辺についても作成した。また、掘削遺構の内、柱穴などの遺構については、半裁掘削後、土層断面の写真記録と、必要に応じて土層断面図を作成してから完掘した。溝状遺構などについても適宜土層断面確認用のベルトを設定し、土層断面を記録している。

調査終了後は重機を用いて掘削土による埋め戻し作業を行った。出土遺物の洗浄及び一次整理作業は現場事務所にて調査作業と並行して実施した。

写真1にI区における基本層序を示す。表土（耕作土）は浅く20cm程である。表土下は褐色砂質シルトを主体とする自然堆積層であり、その下層は丘陵を構成している地山層である。I区における地山層は、明褐色の砂質シルトと褐色の粘質シルトと礫層が互層をなしており、さらに下層では灰白色粘土層となる。遺構検出面は1層（褐色砂質シルト層）下面である。調査時には遺構検出時に地山が互層をなしていることは把握できておらず、調査区東側に礫混じりの褐色粘質シルト層が広がることから人為的な堆積の可能性も含めていたが、地山までの断ち割りトレチの掘削後、先述の堆積状況が分かった。

写真2にII区における基本層序を示す。I区同様に表土（耕作土）は浅く20cm程であった。表土下は黄褐色砂質シルトを主体とする自然堆積層であり、遺物を包含する。調査区西側では25cm、東側では5cm前後を測り、西側に向かって厚く堆積する。その下層は丘陵を構成している地山層である。



第5図 調査区配置図



写真1 I区基本層序



写真2 II区基本層序

第2節 調査経過

〔調査日誌抄〕

- H30.1.9 調査準備開始。現地踏査後、草刈作業を実施した。
- 1.10 草刈作業を継続して実施。重機搬入。
- 1.11 草刈作業を継続して実施。
- 1.12 ~ 1.4 準備体工
- 1.15 現場事務所予定地整地作業実施
- 1.16 基準点測量、ネットフェンスを設置する。支障木の伐採作業を実施した。
- 1.17 現場事務所プレハブ搬入
- 1.18 調査開始。I区の表土掘削を開始した。全体の3分の1まで完了した。
- 1.19 I区表土掘削を引き続き実施し、完了した。引き続き壁面清掃と北側から検出作業を開始。
- 1.20 I区西側の遺構検出を行う。小グリッド設定実施。雨天のため午後は休工。
- 1.23 引き続きI区東側の遺構検出を行う。II区の表土掘削作業開始。
- 1.24 I区略測図作成。調査区西側にトレーニチを設定し掘削開始。II区の表土掘削終了。遺構検出を実施。
- 1.26 I区北側にもトレーニチを設定し掘削。土層断面を精査。II区の小グリッド設定を実施。
- 1.27 I区トレーニチ調査で東側の疊層の厚さを確認した。
- 1.28 I区疊層下層の確認のため、調査区東側にトレーニチを設定し、重機にて粘土層まで掘り下げ断面の確認を行った。
- 1.31 断面確認を行った結果、疊層を除去することとし重機にて掘り下げを実施した。
- 2.1 I区東トレーニチの写真撮影・測量を実施。遺構検出後遺構掘削を開始した。
- 2.5 引き続きI区の遺構掘削を行う。ピットが中心。完掘後は測量作業を実施。II区の遺構検出を行つたが、表土が残っていたため掘り下げを実施。
- 2.6 I区は土坑の掘削を行う。II区は引き続き残存表土の掘り下げを実施し、検出写真を撮影した。
- 2.7 I区遺構掘削終了。完掘写真を撮影し、地形測量を行つた。
- 2.8 II区の表土の掘り下げ後遺構検出を実施。
- 2.9 II区掘り下げ時に設定したベルトを除去後、遺構掘削を開始。027SDの断面写真撮影と実測を行つた。
- 2.13 II区遺構検出状況の写真撮影を行う。028SXの測量・写真撮影を行つた。
- 2.14 II区の遺構掘削を行う。全体の1/2が終了。
- 2.15 引き続きII区の遺構掘削を実施。ピットが深く、しっかりと残っている状況である。



- 2.16 II区の遺構掘削を行う。ほぼ遺構掘削は終了。
2.19 I区北壁の断面写真撮影と測量を実施。II区の土層断面の測量及び写真撮影を実施。調査区全体及び個別遺構の完掘写真撮影。調査を終了した。
2.20 I区埋め戻し作業完了。I次整理作業開始(2/26まで)。
2.21 II区埋め戻し作業開始、同日中に完了した。
2.28 現地原状復旧。現地における作業を終了した。



第4章 I区の調査

第1節 遺構

1 概要

I区は平成27年度実施の範囲確認調査において中世段階（12世紀末～13世紀）の遺構・遺物を確認した8・9トレンチの北側にあたる。調査面積は約200m²である。近現代の耕作に伴う地形改変のため旧地形は詳らかではないが、明治期の地形図と比較すると本地点については比較的旧状を保っているようである。すなわち西側の丘陵上部から河川のある東側へ向かう緩斜面の中腹にあたる。調査では土坑、溝、ピットを確認している（第6図）。また掘立柱建物跡の可能性がある柱列を確認した。全ての遺構は調査区西側に集中しており、東側では確認していない。第2章でも述べたとおり、本調査区内では地山が礫層と砂質シルトないし粘質シルトの互層を呈しており、遺構を確認していない調査区東側は礫層にあたる。

調査時に調査区北側にトレンチを設定して礫層下層まで掘削したが、礫層の掘削は難渋した。このことから、当時においても遺構の掘削しやすさからシルト層が広がる調査区西側を選んだのではないだろうか。なお、平成27年度実施の範囲確認調査において本調査区の南側を調査しているが（8・9トレンチ）、礫層は確認していない。

2 遺構

（1）土坑

土坑は5基を確認した。調査区西側に集中しており、北側に2基と南側4基を地山層上面で検出している。

015SK

調査区北側に位置する。周辺遺構との重複関係はない。平面形は長円形で長軸0.6m、短軸0.42m、深さ0.54mを測る。堆積土は2層に分層される。暗褐色砂質シルトを主体とし、炭化物が微量含まれる。遺物は出土していない。

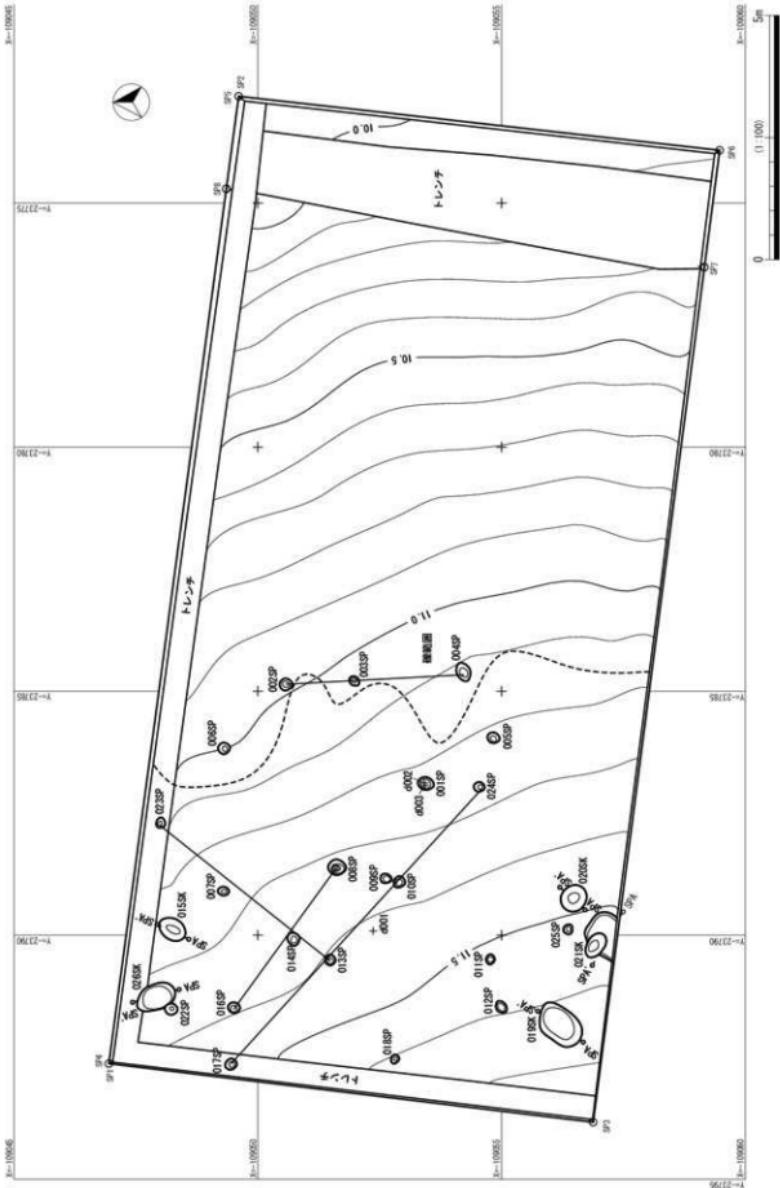
019SK

調査区南側に位置する。周辺遺構との重複関係はない。平面形は長円形で長軸0.97m、短軸0.66m、深さ0.16mを測る。堆積土は2層に分層される。暗褐色砂質シルトを主体とする。遺物は山茶碗の破片が少量出土している。

020SK

調査区南側に位置する。周辺遺構との重複関係はない。平面形は円形で長軸0.54m、短軸0.54m、深さ0.26mを測る。堆積土は3層に分層される。暗褐色砂質シルトを主体とし、炭化物と赤褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。

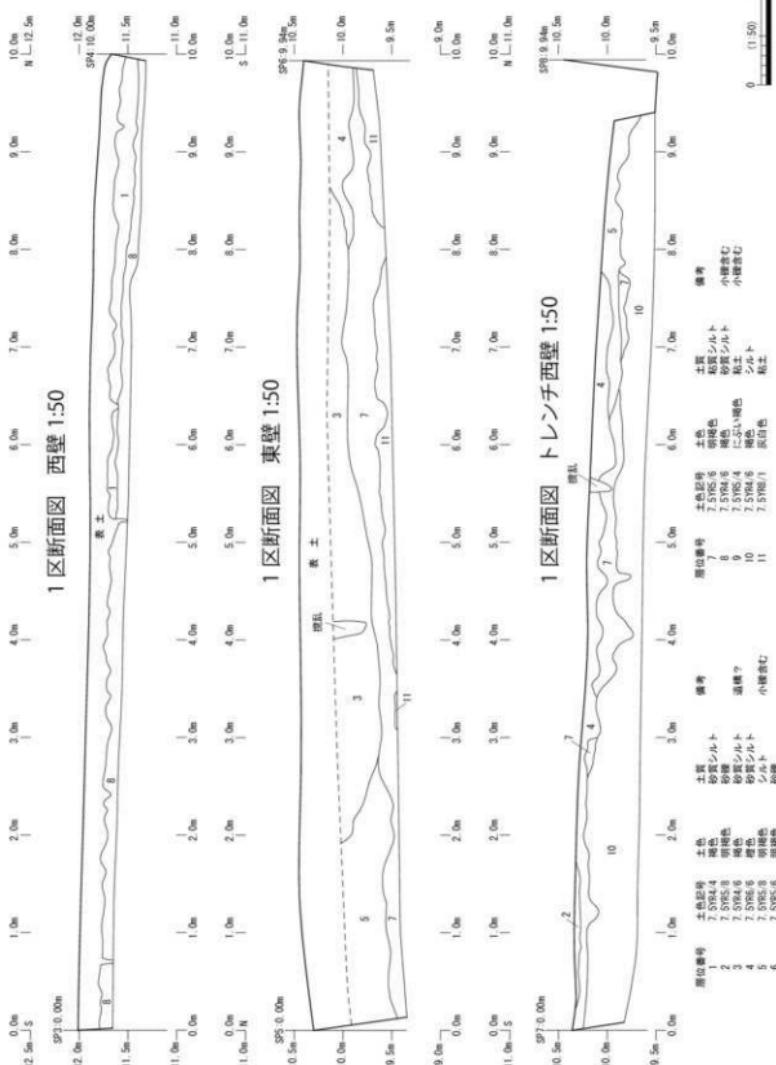
021SK 調査区南側に位置する。検出段階では確認できなかつたが、ピットが付属しており、切り合い関係からこれよりも古い遺構である。調査区外南側へと延びる。平面形は方形と見られ長軸



第6図 I区平面図



第7図 I区北壁断面図



第8図 1区西壁・北壁セクション図

0.6m以上、短軸0.6m、深さ0.1mを測る。堆積土は単層で暗褐色砂質シルトを主体とし、炭化物を微量含む。遺物は出土していない。

026SK

調査区北側に位置する。022SPに切られることからこれよりも古い。平面形は長円形で長軸0.84m、短軸0.52m、深さ0.4mを測る。堆積土は5層に分層される。暗褐色砂質シルトを主体とし、径5~20cm大の焼土ブロックを多量に含む。廃棄土坑とみられる。遺物は出土していない。

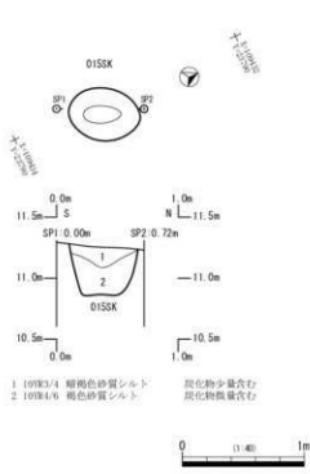
(2) ピット

調査区の中央から西側にかけて21基検出した。ピットのほとんどが長軸0.19~0.4m、短軸0.15~0.34m、深さ0.1~0.5mを測る。

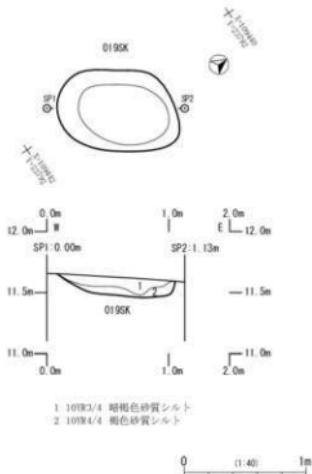
一部のピットでは建物跡になるような配置が認められる。すなわち北西から南東方向に延びる017SP-013SP-010SP-024SPの柱列と、これに並行する016SP-014SP-008SPの柱列、そして、これらに直交して北東から南西方向に延びる023SP-007SP-014SP-013SPの柱列である。これら3つの柱列はその方位に相関関係が認められることから、掘立柱建物跡の一部を構成していると考えられるが、調査区外へ広がっているとみられ調査区内では全体を把握することはできなかった。柱間は概ね2m前後である。なお、近接する平成27年度範囲確認調査で確認した柱列とは方位を異にする。

また、009SP-001SP-004SPについても柱列の可能性があることを指摘しておく。

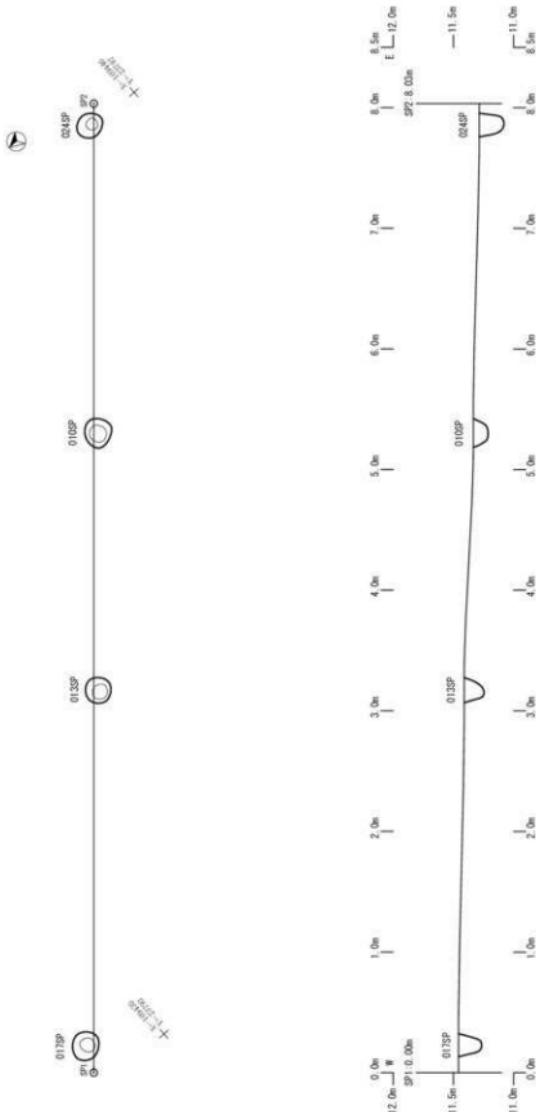
出土遺物としては001SPから山茶碗と中世常滑産陶器の壺破片が出土しているが(図11-1)、他のピットからは出土しておらず、遺構の詳細な所属時期は詳らかではない。



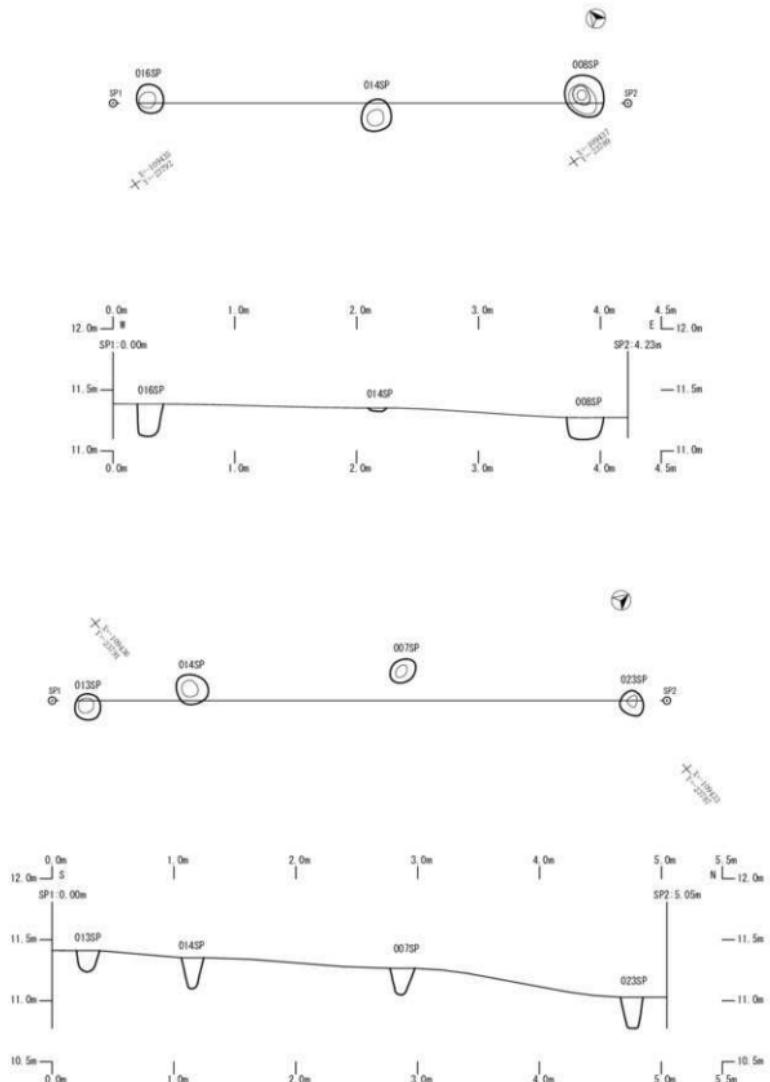
第9図 015SK 平面・断面図



第10図 019SK 平面・断面図



第11図 017SP-013SP-010SP-024SP 平面・エレベーション図



第12図 016SP-014SP-008SP, 023SP-007SP-014SP-013SP 平面・エレベーション図

第2節 遺物

1 遺構出土遺物

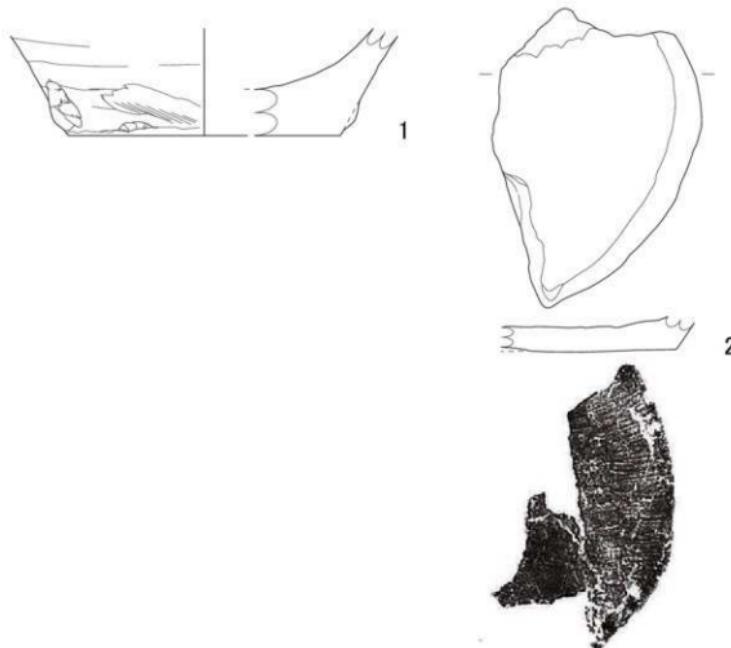
001SP出土遺物（遺物番号1：遺物取上番号008、第13図、写真図版11）

常滑産陶器の広口壺の底部片である。常滑窯編年の6型式にあたる。通常の出土例よりも底部の器壁が厚い。なお001SPからはこの他にも山茶碗の破片が出土しているが小片であり図化し得なかつた。

2 遺構外出土遺物

包含層出土遺物（遺物番号2：遺物取上番号014、第13図、写真図版11）

滑石製石鍋の底部片である。底部のみであるため時期は不明である。温石に再利用される例も多く、その場合は穿孔が認められるが、本資料は穿孔されていないことから再利用されていないとみられる。



第13図 I区出土遺物

第5章 II区の調査

第1節 遺構

1 概要

II区は平成27年度実施の範囲確認調査において中世段階（13世紀後半～14世紀）の遺構・遺物を確認したIトレンチの東側にあたる。調査面積は約70m²である。明治期の地形図と現況を比較すると、I区同様に西側丘陵上部から東側に北流する河川に向かって傾斜する緩斜面の端部にあたり、本地点についても旧状を保っているようである。現在は本調査区のすぐ東側は1m程削平されており旧県道（半田街道）が南北に延びている。この道路の建設に伴って斜面が削平されたとみられる。旧県道から東側は河道域であったとみられる。

調査では、小規模な調査区であるがI区とは比較にならない程多くの遺構・遺物が出土した。土坑、溝、ピット及び性格不明遺構を確認している（第14図）。中でもピットについては、深さが50cmに達し、柱の抜き取り痕がみられるものを複数確認している。掘立柱建物等の柱穴であることは明らかであり、調査区内とその周辺に掘立柱建物が存在することは間違いない。ただし調査区内では確実に掘立柱建物に伴うと考えられる柱列は確認できなかった。調査区南半分には列をなすピットが認められる。柱列と考えることも可能であるが断言できない。

2 遺構

（1）土坑

土坑は1基を確認した。包含層直下で確認している。

031SK（第17図）

調査区南西側で確認した。平面形は円形で長軸0.85m、短軸0.8m、深さ0.16mを測る。堆積土は単層でにぶい黄褐色砂質シルトを主体とし、焼土粒、炭化物を含む。遺物は出土していない。複数の遺構と切り合い関係にある。028SXより古く、032・033・147・148SPより新しい。

（2）溝

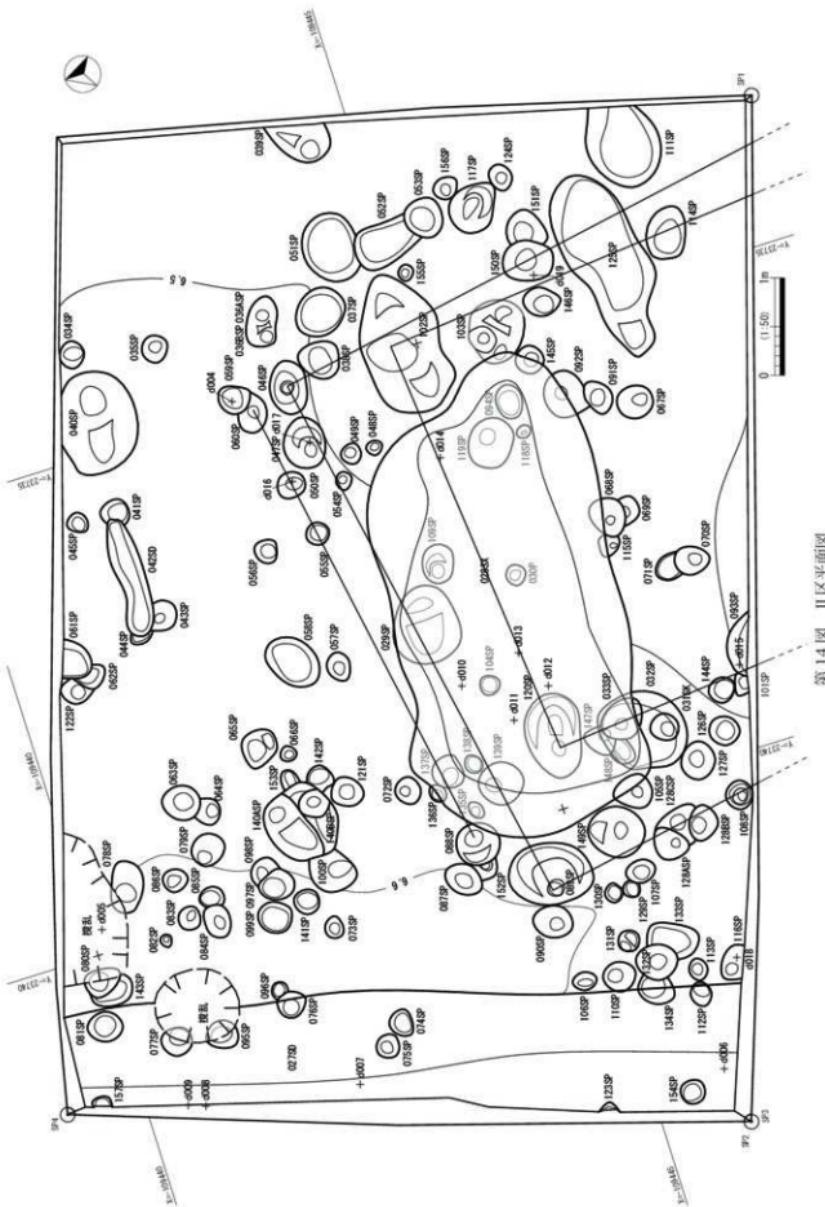
2条の溝状遺構を確認している。

027SD（第15図）

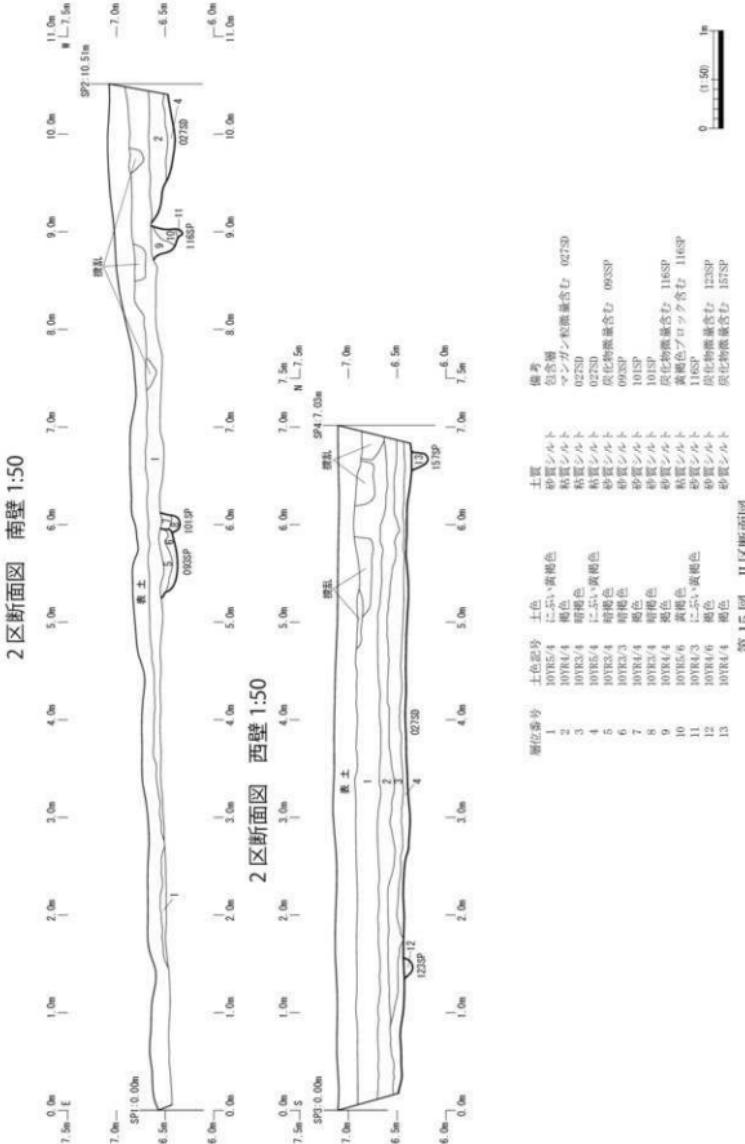
調査区西壁に沿って延びる。切り合い関係にある複数のピットより新しい。規模は長さ10m以上、幅1.3m以上、深さ0.22mを測る。断面形は緩やかなU字形を呈する。堆積土は3層からなり、褐色砂質シルトを主体とし、マンガン粒を微量に含んでいる。遺物は底面より山茶碗を始め甕の脚部等が数点と布目の平瓦が1点出土している（第24図）。

242SD（第13図）

調査区北側ほぼ中央（5C9mグリッド）で確認した。041・043・044SPと切り合い関係があり、いずれの遺構よりも古い。規模は長さ1.23m、幅0.25m、深さ0.07mを測り、主軸方向は東西で、



第14図 II区平面図



調査区内で取束する。堆積土は単層で、にぶい黄橙砂質シルトを主体とし、マンガン粒をわずかに含む。遺物は土器片が少量出土したが小片のため図化しえなかった。

(3) ピット

調査区ほぼ全面で130基を包含層下面にて確認した。ピットの規模は長軸0.14～1.97m、短軸0.13～0.8m、深さ0.06～0.87mを測る。小規模から大規模のピットが検出されているが、多くは直径0.2～0.4m前後が主流である。検出されたピットの中には主柱穴を持つもの、抜取痕を持つものがあるが、確実に建物になるような組み合わせは確認できなかった。前述のとおり調査区外へ広がるものが多いとみられ、複数棟存在すると考えられる。遺物は遺構埋土から山茶碗・山皿の破片を中心出土し、白磁片も数点出土しているが、総量は多くない。以下遺物を伴う遺構を中心報告する。

029SP（第17図）

5C9mグリッドで確認している。028SX下層から出土しており、上面は028SXに削平されている。規模は0.8m×0.7mの楕円形で、深さ0.6mを測る。堆積土は柱穴跡の埋土とみられる暗褐色砂質シルトなどからなる。出土遺物は山茶碗である。

036SP（第18図）

5C9nグリッドで確認している。規模は0.5m×0.3mの楕円形で、深さは0.5mを測る。堆積土は暗褐色砂質シルトと褐色砂質シルトからなる。柱穴の可能性が高い。出土遺物は山茶碗と山皿である。

040SP（第18図）

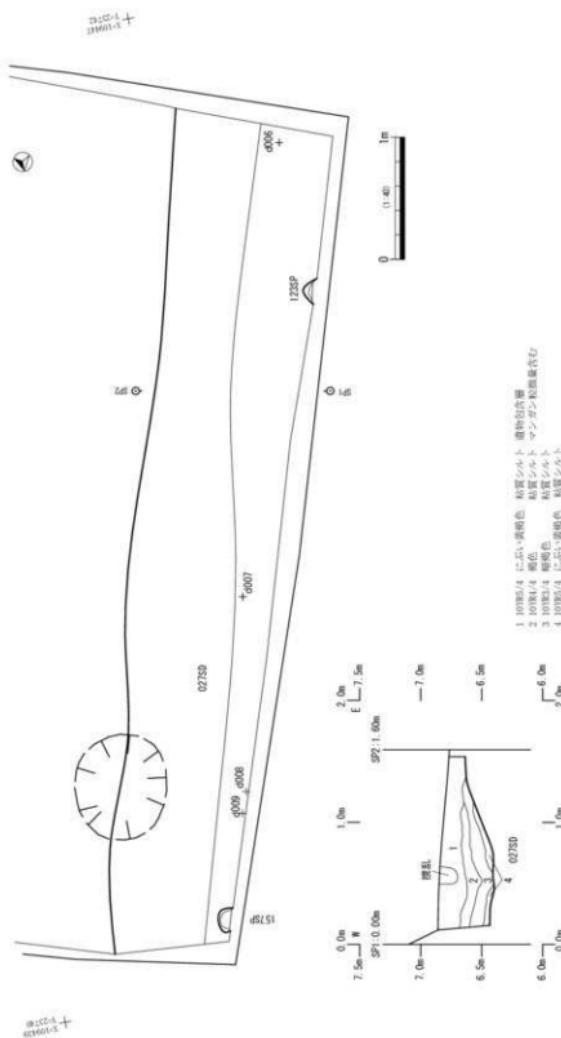
調査区北壁沿い（5C9m・5C9nグリッド）で確認している。調査区外に広がっているため正確な規模は不明であるが、1m×約0.8mの楕円形で、深さ0.65mを測る。本調査区内では規模の大きいピットである。堆積土の観察から柱の抜取跡が認められ、柱穴であることは間違いない。出土遺物に陶丸がある。

046SP（第18図）

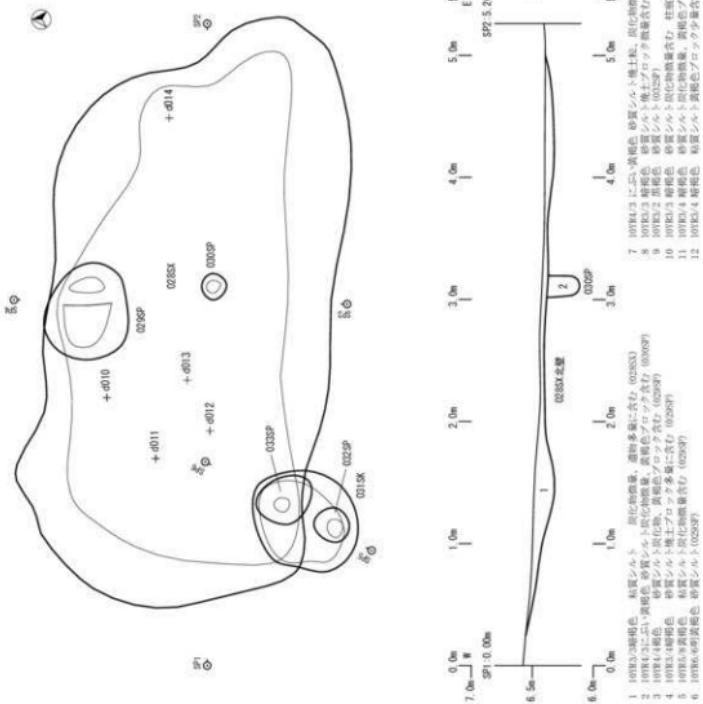
5C9nグリッドで確認した。0.55m×0.35mの楕円形で、深さは0.55mを測る。中央に柱跡とみられる掘り込みがあり、その周辺は抜取痕とみられる。出土遺物はない。

047SP（第18図）

5C9nグリッドで確認した。0.5m×0.4mの楕円形で、深さ約0.5mを測る。柱跡とみられる掘り込みがあり、周辺は抜取痕と考えられる。出土遺物は図化しえなかつたが、山茶碗の破片が出土している。



第16図 027SD 平面図・断面図

+ 110044
+ 122346

第17図 028SX, 029SP, 030SP, 031SP, 031SK, 032SP, 033SP 平面図・断面図

079SP (第13図)

5C9m グリッドで確認している。規模は直径 0.3m の円形で、深さは約 0.5m を測る。山茶碗が出土した。

084SP (第19図)

調査区北東 (5C9m グリッド) で確認している。規模は $0.35m \times 0.25m$ の楕円形で、深さ約 0.3m を測る。085SP と重複しており、本遺構は切り合い関係から 085SP より新しい。柱穴とみられ、柱の抜取跡の堆積土から山茶碗、山皿が出土した。

088SP (第19図)

5C9l グリッドで確認した。直径 0.45m の円形で、深さは 0.35m を測る。152SP と重複関係にあり、切り合い関係から 088SP の方が新しい。埋土の土層観察から柱の抜取痕跡が認められることから柱穴跡と考える。出土遺物はない。

089SP (第19図)

5C9l グリッドで確認した。 $0.9m \times 0.6m$ の楕円形で、深さは約 0.5m を測る。遺構中央西寄りに柱跡とみられる掘り込みがあり、周辺は抜取痕と考えられる。出土遺物はない。

093SP (第13図)

調査区南壁 (5C9m グリッド) で確認した。遺構の大半が調査区外のため、規模は不明であるが、調査区内で確認した平面形とゆるやかに落ち込む断面形状から、089SP と同規模の直径 0.8m 程の楕円形になるとみられる。089SP 同様に柱穴になる可能性が高い。堆積土から耳皿状を呈する器形の山皿が出土した。

100SP (第19図)

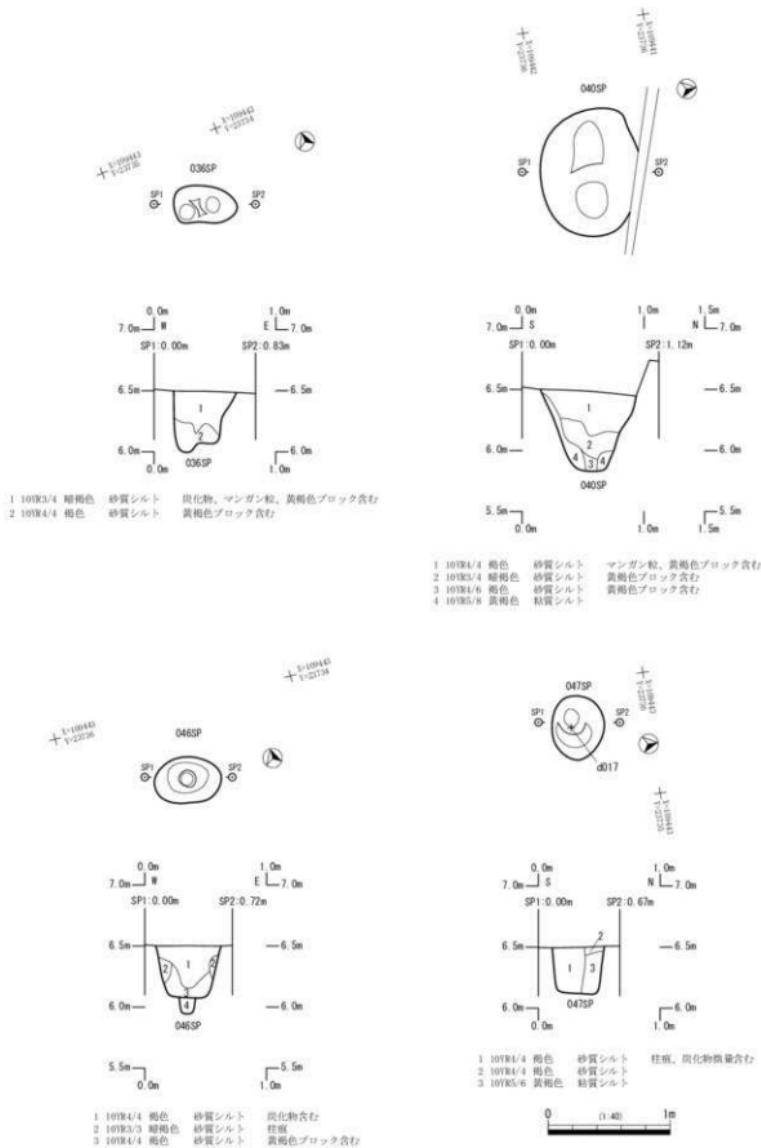
5C9m グリッドで確認している。規模は直径 0.25m の円形で、深さ約 0.3m を測る。山茶碗と丸瓦片が出土している。

102SP (第20図)

調査区東側 (5C9m, 5C9n, 5C10m, 5C10n グリッド) で確認した。 $1.45m \times 0.8m$ の楕円形で、深さ 0.7m を測る。本調査区内では大規模なビットである。柱穴と考えられ、柱の抜取跡もみられる。遺物は出土していない。

104SP (第20図)

調査区南側 (5C10m グリッド) で確認した。直径 0.2m の円形で、深さは 5cm と浅い。出土遺物に常滑産陶器の短頸壺がある。



第18図 036SP, 040SP, 046SP, 047SP 平面図・断面図

116SP（第20図）

調査区南壁（5C10I グリッド）で確認した。一部が調査区外であるが、 $0.4m \times 0.3m$ （推定）の楕円形で、深さ $0.3m$ を測る。山皿が出土している。

137SP（第20図）

5C9m グリッドで確認した。 $0.35m \times 0.4m$ の円形で、深さは $0.35m$ を測る。埋土の状況から柱穴跡の可能性がある。遺物は出土していない。

150SP（第20図）

調査区南東側（5C10n グリッド）で確認した。 $0.4m \times 0.5m$ の楕円形で、深さは $0.4m$ を測る。151SP と重複関係にあり、切り合い関係から 150SP の方が新しい。埋土の土層観察から、柱跡が認められることから柱穴跡と考えられる。なお、その規模、深さから 151SP に先行する柱穴跡であったとみられる。出土遺物には小破片ではあるが白磁が出土している。

(4) 性格不明遺構

028SX（第15図）

調査区南側（5C9m、5C10m グリッド）で確認した。重複関係は 031SK はじめ重複する全てのピットより新しい。平面形東西 $4.48m$ 、南北 $2.3m$ を測る不整楕円形である。深さは $0.32m$ である。堆積土は暗褐色砂質シルトの単層で、出土遺物は山茶碗や山皿を中心に出土している。出土遺物の時期から埋没時期は 13世紀前葉とみられる。重複する遺構からはほとんど遺物が出土していないが、104SP から出土した常滑短頸壺が 12世紀代に位置づけられることから、柱穴の埋没時期と本遺構の形成時期にはそれ程間が空いていなかったと考えられる。遺構の性格は不明であるが、複数の遺物が出土していることから何らかの廃棄行為にともなう遺構である可能性がある。

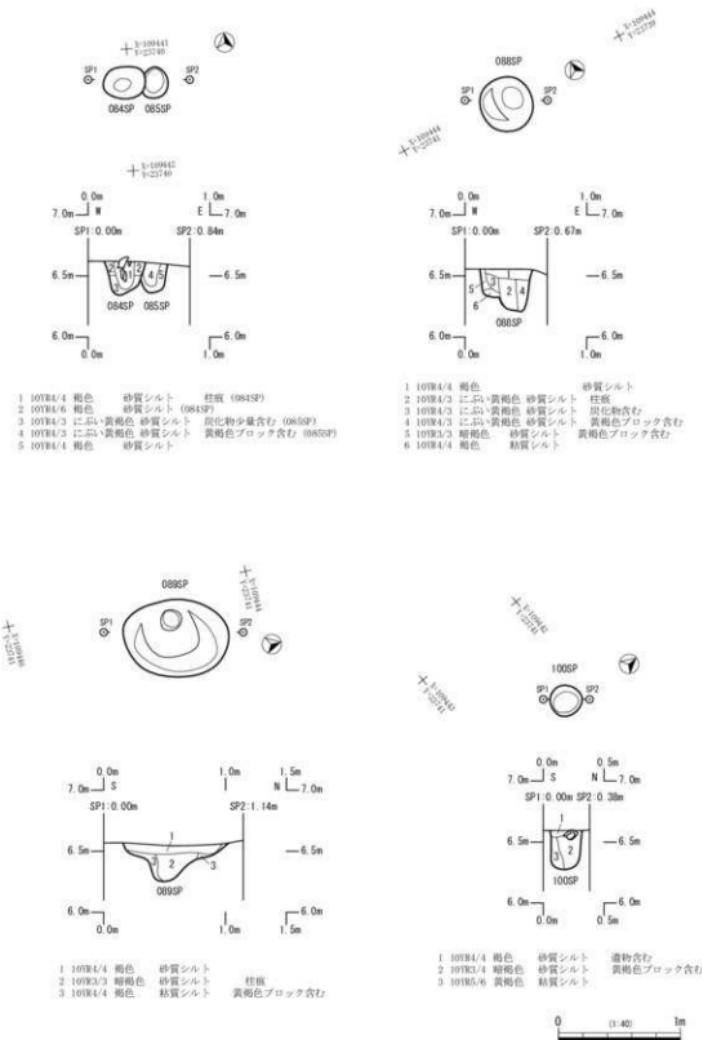
第2節 遺物

II区からは多くの遺物が出土した。全て中世段階であり、範囲確認調査時に出土した石器などの前代の遺物は出土しなかった。ほとんどが在地産もしくは近隣地域産であるが、わずかに貿易陶磁も出土している。以下遺構出土と遺構外出土に分けて、器種毎に報告する。

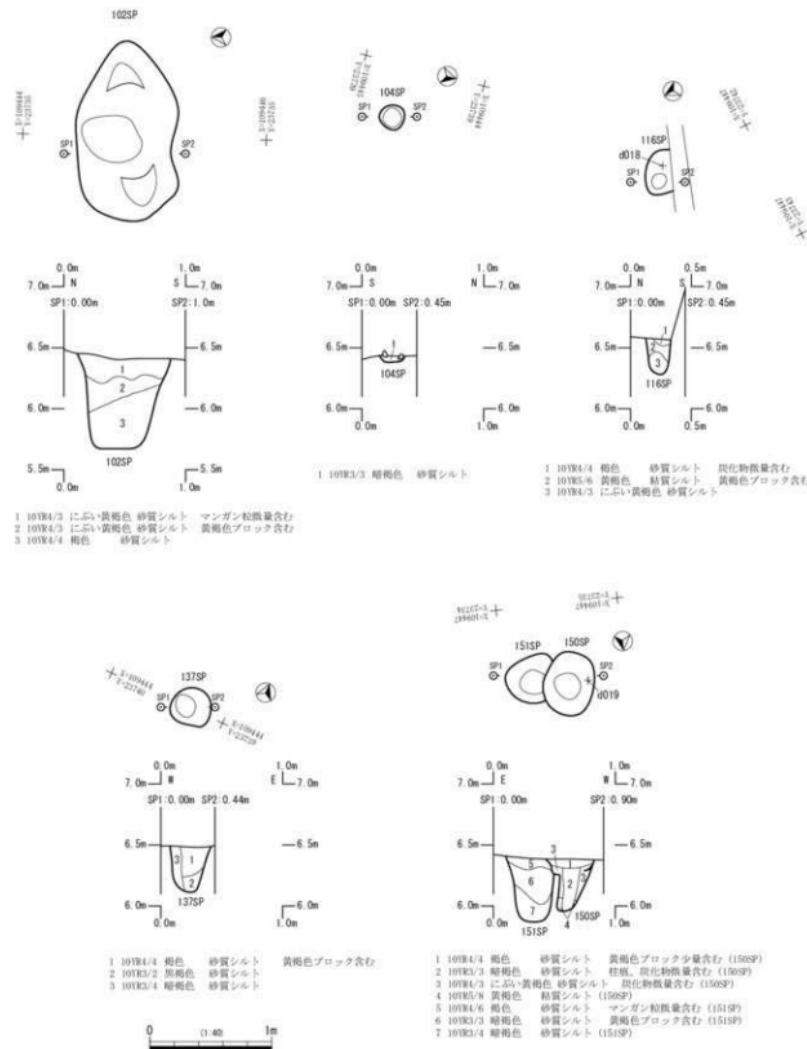
I 遺構出土遺物

(1) 山茶碗（第21・22図）

全体で 12 点出土している。028SX からは 3 点が出土している。在地（知多半島）産とみられ、いずれも常滑編年 5 型式にあたる。036SP からは 2 点出土している。遺物番号 6 は常滑編年 5 型式にあたり、遺物番号 7 は、尾張産（瀬戸か）とみられ、尾張編年の 6 型式に位置づけられる。029SP 出土の遺物番号 8 の山茶碗については全体の半分ほど残っており、内面に煤および使用に伴う擦痕がみられる。ある程度飲食器として使用した後、灯明皿などの用途に再利用した可能性が



第19図 084SP、088SP、089SP、100SP 平面図・断面図



第20図 102SP、104SP、116SP、137SP、150SP 平面図・断面図

ある。在地（知多半島）産とみられ、常滑編年の5型式に位置づけられる。遺物番号9、10（079SP出土）、14（100SP出土）の山茶碗については常滑編年4型式に位置づけられる。遺物番号11、12（084SP出土）、13（106SP出土）の山茶碗については常滑編年5型式にあたる。

（2）山皿（第22図）

全体で8点出土している。036SP出土資料（遺物番号17）は、共伴する山茶碗同様に尾張産（瀬戸か）とみられ、尾張編年の6型式にあたる。遺物番号18（095SP出土）、22（084SP出土）、23（116SP出土）、24（150SP出土）については、在地（知多半島）産とみられ、常滑編年の5型式に位置づけられる。遺物番号19（028SX出土）については、常滑編年の6型式にあたる。また、遺物番号20（028SX出土）は、その胎土や色調から渥美窯産製品である可能性がある。常滑編年における5型式並行段階に位置づけられる。

特殊な遺物として093SPから出土した山皿（遺物番号21）がある。山皿の口縁部両端を棒状の工具で押さえつけることで窪ませている。この調整が何のために施されているかは不明であるが、灰釉陶器における耳皿のような箸置きとして利用方法を想定しておきたい。

（3）短頸壺（第23図、遺物番号30）

104SPから出土した。口縁部の1/10ほどしか残っていない小破片である。在地（知多半島）産とみられ、12～13世紀代に位置づけられる。

（4）甕（第23図）

全体で3点出土している。遺物番号31（027SD底面出土）は常滑産陶器の甕の体部片である。底部に近い部位であり、時期は詳らかではないが15世紀代とみられる。遺物番号32（101SP）、33（028SX）は同じく常滑産陶器の甕の体部片である。表面に印架がみられることから肩部の破片であるとみられる。常滑編年の2型式に位置づけられる。

（5）瓦（第23図）

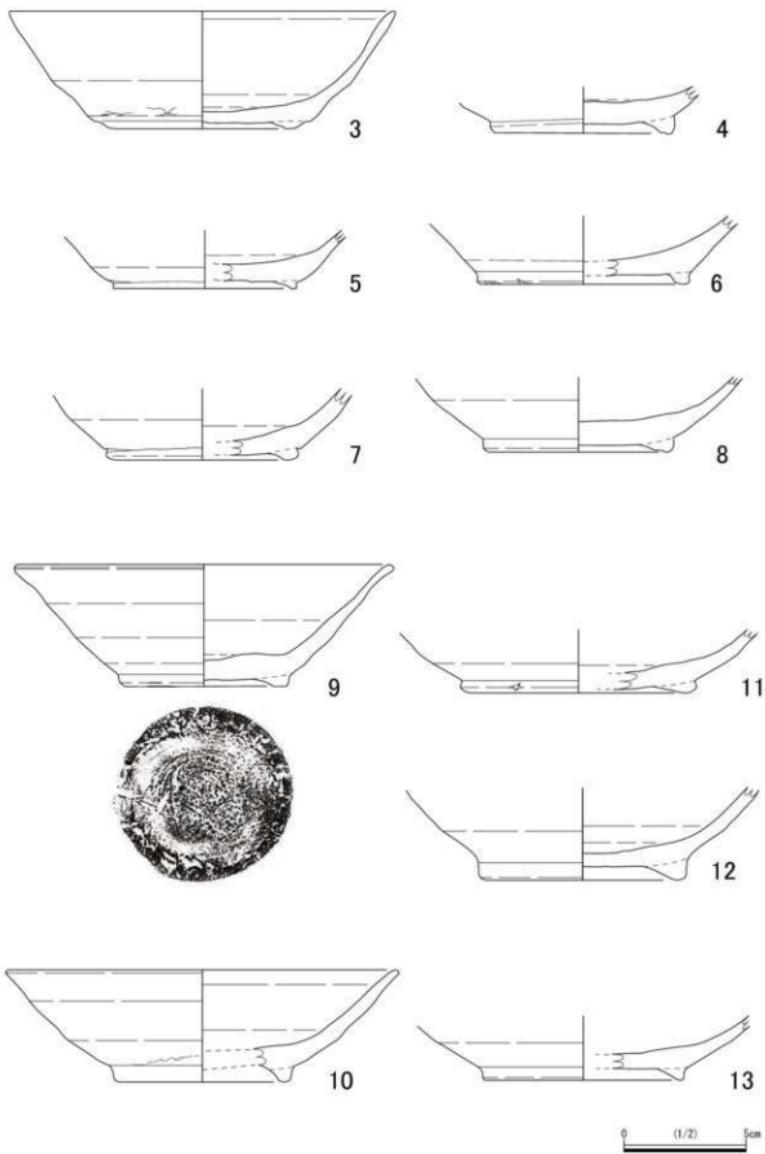
全体で2点出土している。いずれも丸瓦で、遺物番号35（027SD底面）及び遺物番号36（100SP）がこれにあたる。小破片であり布目瓦である。12世紀末頃に位置づけられよう。

（6）貿易陶磁・その他（第24図）

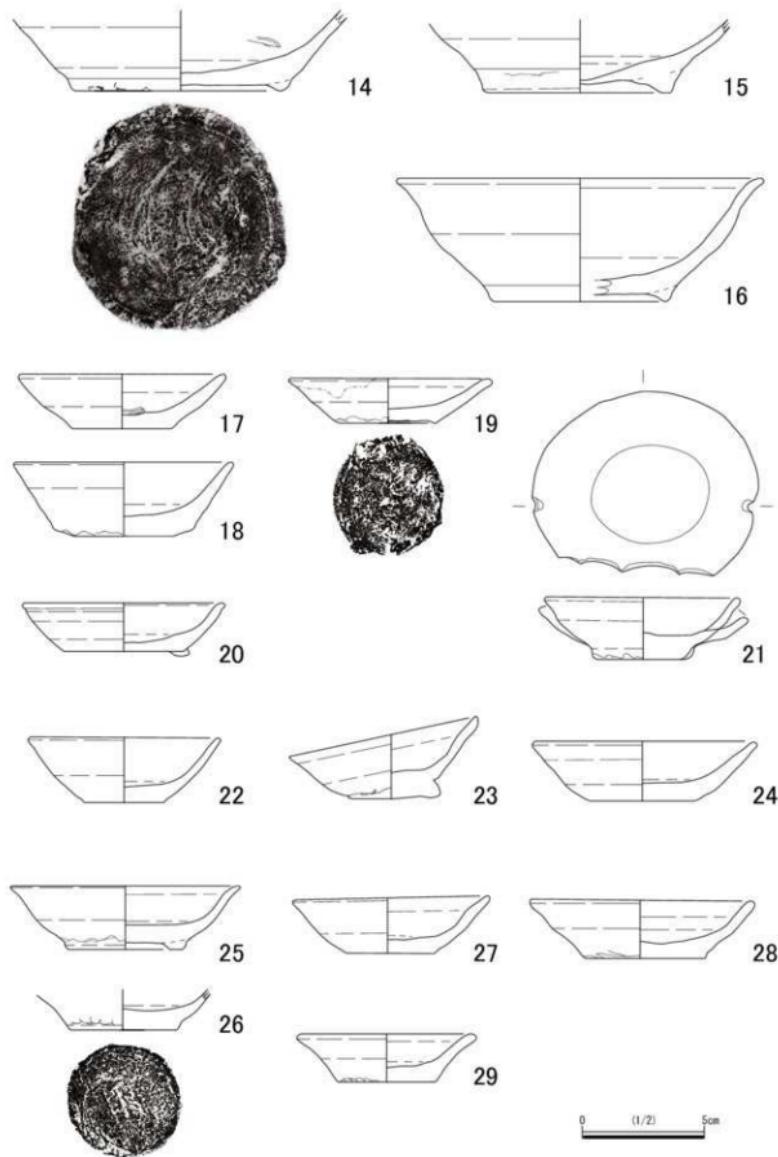
貿易陶磁では白磁が1点出土している。150SPから出土した（遺物番号39）。白磁碗の口縁部の破片である。12世紀代か。この他陶丸が出土している（遺物番号41）。

2 遺構外出土遺物

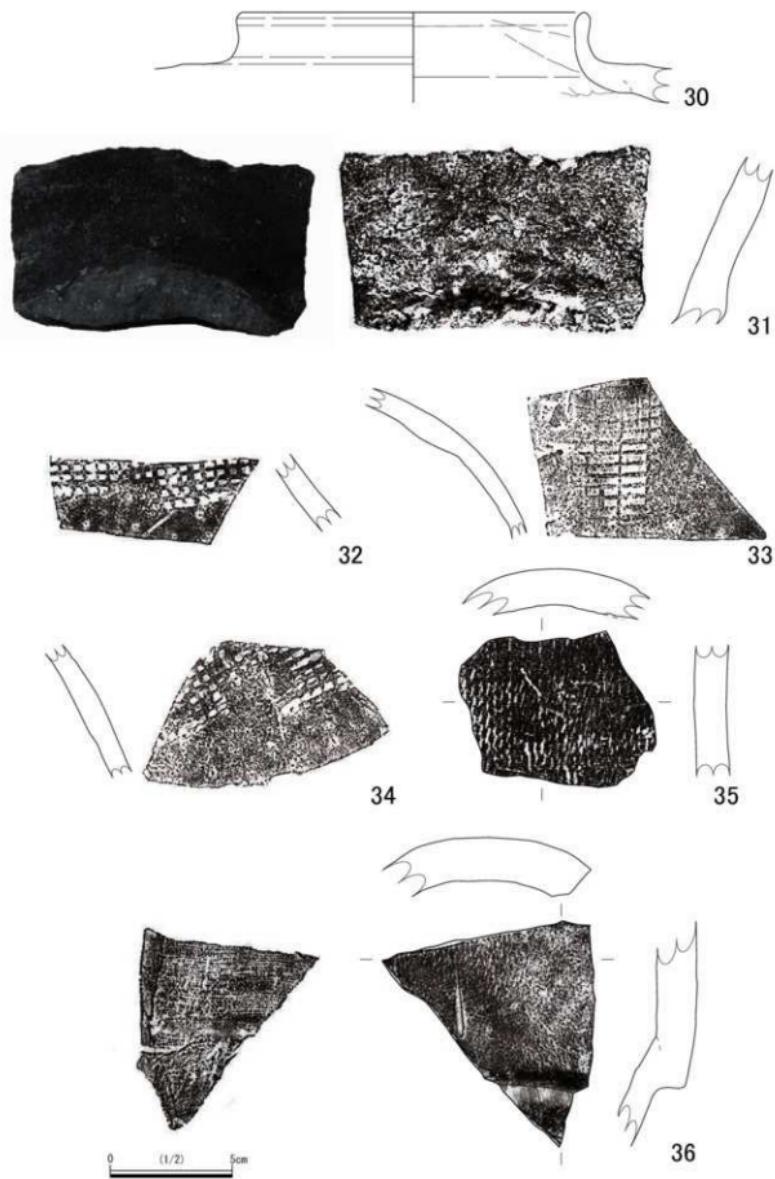
遺構外出土遺物は遺構検出時に包含層から出土している。このうち図化可能な遺物は11点であつた。出土器種は山茶碗、小碗、山皿、常滑産三筋壺、土師器伊勢型鍋、常滑産甕、貿易陶磁（青磁）がある。以下に器種毎に時期及び特徴を報告する。



第21図 II区出土遺物(1)



第22図 II区出土遺物 (2)



第23図 II区出土遺物(3)

(1) 山茶碗・小碗 (第22図)

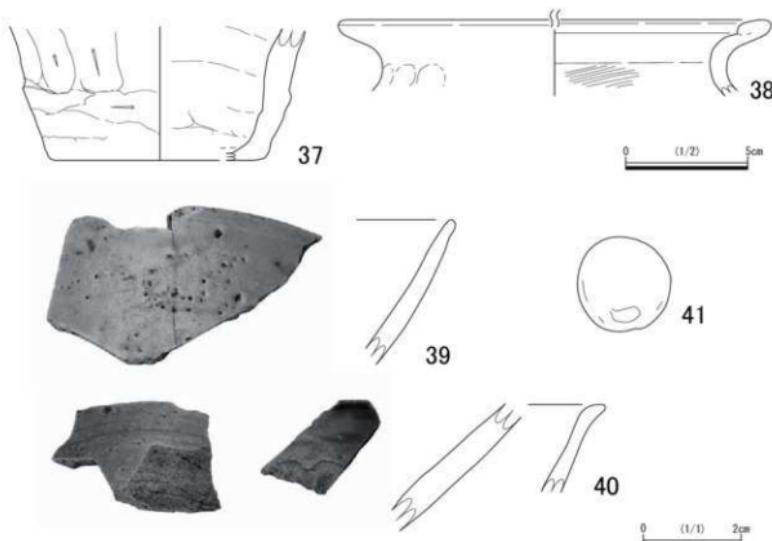
國化可能なものは山茶碗2点、小碗1点であった。山茶碗のうち遺物番号15は在地(知多半島)産であり、常滑編年の5型式にあたる。遺物番号16は尾張産であり、尾張編年の6型式にあたる。いずれも13世紀前葉に位置付けられる。遺物番号25の小碗は、在地(知多半島)産であり、常滑編年の4型式にあたる。12世紀末から13世紀初頭に位置付けられる。

(2) 山皿 (第22図)

國化可能なものは4点であった(遺物番号26~29)。在地(知多半島)産が3点、尾張産が1点である。在地産山皿については全て常滑編年の5型式にあたる。尾張産山皿については6型式にあたる。いずれも13世紀前葉に位置付けられる。

(3) 三筋壺・伊勢型鍋・常滑産甕・貿易陶磁 (第23・24図)

遺物番号37は在地(知多半島)産の三筋壺である。底部片が出土した。常滑編年の5型式にあたり、13世紀前葉に位置付けられる。遺物番号38は伊勢型鍋である。13世紀代に位置付けられる。遺物番号34は常滑産陶器の甕である。肩部片で印架が認められる。常滑編年の2型式にあたる。遺物番号40は貿易陶磁(青磁)である。口縁部のみの破片で、小片のため器種は不明であり、産地は不明であるが、13世紀代か。



第24図 II区出土遺物(4)

第6章 総括

第1節 調査成果

今回の発掘調査では、調査区ごとに以下のような成果が得られた。

1 I 区

I 区は平成 28 年度実施の範囲確認調査では 12 世紀末から 13 世紀の遺構が残っているとみられる範囲の中心部分にあたると考えられていた。結果として、柵列または建物跡の可能性があるビット列を確認したことから、当初の想定通りの成果が得られたと言える。しかしながら、斜面上部側の調査区西側に遺構が集中し、東側には遺構がみられず、当初の予想よりも確認した遺構数は少なかった。さらに、出土遺物は極めて少なく、I 区全体の時期比定は困難であるが、唯一の遺構出土遺物から 13 世紀後葉の可能性が考えられる。また、調査区東側半分、斜面下側で確認した礫混じりの褐色粘質シルト層について、当初人為的堆積と考えていたが、調査の結果地山層であることが判明した。この礫混じりのシルト層上には遺構は認められなかつたことから、意図的に礫混じり層を避けて利用しているとみられる。遺跡内での土地利用をうかがい知ることができる。

2 II 区

II 区は平成 28 年度実施の範囲確認調査では、13 世紀後半から 14 世紀の遺跡範囲の中心にあたると考えられていた。調査の結果、70m²の狭い調査区内で 130 以上の遺構を確認した。遺構の多くはビットで、中には抜取痕が確認できるものもあり、明らかに柱穴と考えられる。建物跡を検討したが、調査区が狭いことから掘立柱建物と確定できた例はない。確認した遺構は重複関係にある遺構も多いことから、継続して利用された場所のようである。また、遺構数に比べて出土遺物はそれ程多くないことも特徴的である。出土遺物の時代は 12 世紀末から 13 世紀半ばまでに集中する。これは範囲確認調査時の結果とは一致しない。出土遺物の組成を見てみると、煮炊具が極めて少なく、食膳具（碗・皿）が主体を占めることが注目される。なお、貯蔵具も比較的少量にとどまる。ごくわずかではあるが貿易陶磁も出土する。

第2節　まとめ

1 北広遺跡の性格

北広遺跡はこれまで遺物散布地として把握されており、表採遺物から中世とされてきた。今回の調査で明らかにすることができた北広遺跡の姿について考察する。まず、今回の調査で出土した遺物の組成を見てみると、先述のとおり食膳具に偏った遺物組成となっている。碗皿類に代表される食膳具が多く、一般的な集落遺跡で出土する煮炊具や貯蔵具が少ないと本遺跡の大きな特徴と言える。すなわち、定住を伴う一般的な集落とは異なった性格の遺跡であると言える。また、I区とII区では遺構の様相が異なる。I区は柵列ないし柱列が認められるものの、遺構密度が少ないことから、継続的に利用されていた場所とは考えにくい。小屋や柵のようなものが一時的に構築されていた可能性が考えられる。これに対してII区は遺構数・密度ともに高いことから、一定期間継続的に利用されていたようだ。その時期は、出土遺物から、12世紀末から13世紀後葉にかけての期間とみられる。時期区分では、古代から中世へと代わっていく頃で、平安時代末から鎌倉時代にかけての時期にあたる。

では、こうした北広遺跡の特徴からうかがえる遺跡の姿はどのようなものであつただろうか。まず、集落遺跡の可能性が低いことは出土遺物が示唆するとおりである。場合によってはさらに東側の河川側に集落の本体が広がっている可能性はないわけではないが、明治以降の道路建設に伴って地形が改変されており、遺物が表採されていないことから、この可能性は低い。同様に古窯等の生産遺跡が周辺で確認されていないことから、生産遺跡に関する遺跡の可能性も否定される。そこで考えられるのが城館の可能性である。北広遺跡が所在する本田の丘陵は、中世には本田城が存在している。文献に本田城が登場するのは、弘治年間～天正年間（1550～1590年代）のことである。ただし、本田城の成立時期については文献ではわからない。そして、今回の調査で判明した北広遺跡の時期の12世紀末から13世紀とは300年以上の開きがある。このため直接比較することはできないが、本田城の城主であった荒尾氏については、鎌倉時代から文献にその名が見え、有力な御家人として活動していたことが分かっている。そして、室町時代においても足利将軍家と直接に結びついた奉公衆として鎌倉時代に引き続いて大きな勢力を有していたとされる。荒尾氏の勢力に限ってみると、本田城が文献に登場する戦国時代よりも鎌倉・室町時代の方がはるかに勢力を有していたようである。このことが本田城と北広遺跡とのように関わるのかは推測の域を脱しないが、北広遺跡が存続していた平安時代末から鎌倉時代にかけて、当地は荒尾氏の勢力下にあった可能性は高いと考える。そしてそれは、後世に本田城が築かれたことと無関係ではないと考えられる。中世において本田の丘陵から伊勢湾を見下ろす大田の平野（現在の大田町中心部）は、熱田神宮領であった。神宮領である大田の平野を臨むこの本田の丘陵は古くから戦略的重要性が高いことは容易に想像できる。こうした状況の中、本田城の前身となる城館的施設が存在していてもおかしくはない。

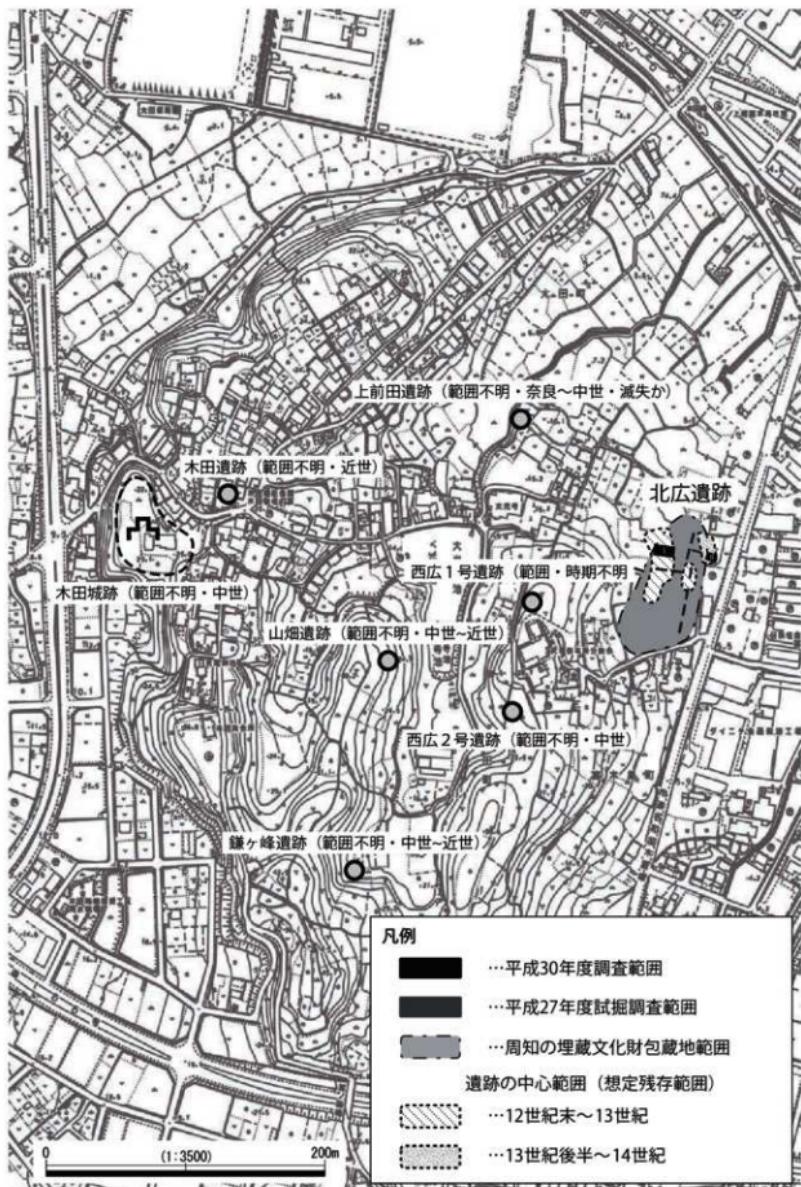
北広遺跡は加木屋の谷から大田の平野に流れる大田川に面し、東側への眺望が効く丘陵端部にあることから、見張り小屋程度の規模の建物や小規模な柵列などが存在していたのではないだろうか。そして、13世紀以降には北広遺跡は利用されなくなり、後の中世城館としての本田城へその機能

は取扱されていくのではないか。北広遺跡周辺には西広1号遺跡をはじめ、複数の中世遺跡が所在している。いずれの遺跡も遺物散布地であって詳細は分かっていないが、近世遺物は表採されていないことから継続していないようであり、少なくとも木田の丘陵全体が中世には利用されていて、近世にはそれ程利用されていないことがうかがえる。このことも木田城の消長と関わり合っており、北広遺跡と同じような施設が一時期設けられていた可能性がある。なお、この説はあくまでも推論であり、木田城やその周辺の遺跡の調査が行われることで、北広遺跡の理解は変わっていくことは当然であり、現時点での一つの推論として提示しておく。

これまで木田の丘陵は大きな開発が及ぶことがなく、市内でも遺跡が良好に残るエリアとして現在まで存続してきた。今回の土地改良事業では、丘陵のかなりの範囲がかつての姿から大きく変わることになる。北広遺跡もこの調査成果を本報告によって後世に伝えることで、現地は道路へと姿を変える予定である。様々な開発や土地利用によって土地の姿は変わっても、遺跡としての価値は不变である。むしろ、周辺の調査が進むことで新たな価値が付加される場合もある。今回の北広遺跡の発掘調査成果が東海市の中世を知る一つの事例となれば幸いである。

《参考文献一覧》

- 『柳ヶ坪遺跡（付載 高ノ御前遺跡、松崎貝塚）』1971 東海市教育委員会
『中ノ池遺跡群発掘調査報告書（付載1 高ノ御前遺跡第3地点試掘調査報告、付載2 岩屋口古墳調査報告）』
1981 東海市教育委員会
『愛知県中世城館調査報告IV（知多地区）』1998 愛知県教育委員会
『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』1999 愛知県教育委員会
『東海市史 通史編』1990 東海市
『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』2012 愛知県
『概説 中世の土器・陶磁器』1995 中世土器研究会編 真陽社
『愛知県東海市 煙間・東烟・郷中遺跡発掘調査報告－平成11～19年度調査』2014 東海市教育委員会
『北広遺跡範囲確認調査報告』2016 東海市教育委員会



第25図 北広遺跡と木田城

造構一覧表

調査区	通構 番号	通構名	性構	グリット	高さ (m)			出土遺物	備考
					前輪	中輪	後輪		
I 区	001	SP	ピット	SC8c	0.33	0.26	0.31	広口器 (No.1)	
I 区	002	SP	ピット	SC8d	0.25	0.25	0.24		
I 区	003	SP	ピット	SC8d	0.23	0.19	0.11		
I 区	004	SP	ピット	SC8d	0.40	0.28	0.34		
I 区	005	SP	ピット	SC8c	0.25	0.23	0.30		
I 区	006	SP	ピット	SC7c	0.25	0.24	0.22		
I 区	007	SP	ピット	SC7c	0.24	0.18	0.22		
I 区	008	SP	ピット	SC8c	0.36	0.32	0.37		
I 区	009	SP	ピット	SC8c	0.25	0.18	0.12		
I 区	010	SP	ピット	SC8c	0.24	0.22	0.12		
I 区	011	SP	ピット	SC8b	0.21	0.18	0.12		
I 区	012	SP	ピット	SC8b・SC9b	0.28	0.22	0.10		
I 区	013	SP	ピット	SC8b	0.21	0.21	0.17		
I 区	014	SP	ピット	SC8b	0.26	0.25	0.28		
I 区	015	SK	土坑	SC7c	0.60	0.42	0.54		
I 区	016	SP	ピット	SC7b	0.25	0.22	0.25		
I 区	017	SP	ピット	SC7b	0.25	0.22	0.20		
I 区	018	SP	ピット	SC8b	0.19	0.15	0.24		
I 区	019	SK	土坑	SC9b	0.97	0.66	0.16		
I 区	020	SK	土坑	SC9c	0.54	0.54	0.26		
I 区	021	SK	土坑	SC9b・SC9c	—	—	0.09		
I 区	021	SK	土坑	SC9b・SC9c	0.55	0.34	0.53		
I 区	022	SP	ピット	SC7b	0.24	0.24	0.36		
I 区	023	SP	ピット	SC7c	0.21	0.19	0.27		
I 区	024	SP	ピット	SC8c	0.23	0.20	0.20		
I 区	025	SP	ピット	SC9c	0.29	0.20	0.30		
I 区	026	SK	土坑	SC7b	0.84	0.52	0.40		焼土ブロック多量に出土
II 区	027	SD	溝	SC9b・10i	—	—	0.22	高麗鏡 (No.24) 丸瓦 (No.27)	
II 区	028	SK	平明	SC9m・SC10m	4.48	2.30	0.32	山形鏡 (No.48.49) 山皿 (No.17), 高麗鏡 (No.26)	
II 区	029	SP	ピット	SC10m	0.80	0.66	0.63	山形鏡 (No.8)	追取跡あり
II 区	030	SP	ピット	SC10m	0.22	0.20	0.31		
II 区	031	SK	土坑	SC10m	0.85	0.80	0.16		
II 区	032	SP	ピット	SC10m	0.29	0.29	0.50		
II 区	033	SP	ピット	SC10m	0.48	0.38	0.54		
II 区	034	SP	ピット	SC9n	0.38	0.26	0.54		
II 区	035	SP	ピット	SC9n	0.27	0.25	0.12		
II 区	036-A	SP	ピット	SC9n	—	—	0.49	山形鏡 (No.6.7) 山皿 (No.15)	ピット A・B の2基あり 堆積土は2基とも同じ。
II 区	036-B	SP	ピット	SC9n	—	—	0.52		ピット A・B の2基あり Aと同じ内容
II 区	037	SP	ピット	SC9n	0.53	0.45	0.06		
II 区	038	SP	ピット	SC8m・SC8n	0.41	0.39	0.11		
II 区	039	SP	ピット	SC9n	—	0.49	0.87		後期跡あり
II 区	040	SP	ピット	SC9m・SC9n	1.03	0.82	0.70	陶丸 (No.63)	追取跡あり
II 区	041	SP	ピット	SC9m	0.30	0.28	0.46		
II 区	042	SD	溝	SC9m	1.23	0.25	0.07		
II 区	043	SP	ピット	SC9m	—	0.30	0.14		
II 区	044	SP	ピット	SC9m	—	0.20	0.12		
II 区	045	SP	ピット	SC9m	0.22	0.20	0.21		
II 区	046	SP	ピット	SC8m・SC9n	0.56	0.38	0.57		

調査区	遺構 番号	遺構名	性質	グリッド	基盤 (m)			出土遺物	備考
					基盤	埋輪	深さ		
Ⅱ区	047	SP	ピット	SC9m	0.52	0.43	0.58		
Ⅱ区	048	SP	ピット	SC9m	0.17	0.15	0.13		
Ⅱ区	049	SP	ピット	SC9m	0.20	0.20	0.22		
Ⅱ区	050	SP	ピット	SC9m	0.29	0.25	0.18		
Ⅱ区	051	SP	ピット	SC9m	0.72	0.57	0.08		
Ⅱ区	052	SP	ピット	SC9n - SC10n	—	0.41	0.07		
Ⅱ区	053	SP	ピット	SC10n	0.42	0.38	0.39		
Ⅱ区	054	SP	ピット	SC9m	0.16	0.16	0.21		
Ⅱ区	055	SP	ピット	SC9m	0.23	0.23	0.15		
Ⅱ区	056	SP	ピット	SC9m	0.25	0.23	0.12		
Ⅱ区	057	SP	ピット	SC9m	0.30	0.24	0.15		
Ⅱ区	058	SP	ピット	SC9m	0.62	0.44	0.10		
Ⅱ区	059	SP	ピット	SC9m - SC9n	0.34	0.28	0.08		
Ⅱ区	060	SP	ピット	SC9m	0.40	0.28	0.24		
Ⅱ区	061	SP	ピット	SC9m	—	0.40	0.54		
Ⅱ区	062	SP	ピット	SC9m	0.28	—	0.11		
Ⅱ区	063	SP	ピット	SC9m	0.39	0.35	0.22		
Ⅱ区	064	SP	ピット	SC9m	—	0.27	0.19		
Ⅱ区	065	SP	ピット	SC9m	0.37	0.34	0.17		
Ⅱ区	066	SP	ピット	SC9m	0.17	0.15	0.09		
Ⅱ区	067	SP	ピット	SC10m	0.37	0.33	0.46		
Ⅱ区	068	SP	ピット	SC10m	0.41	0.35	0.47		
Ⅱ区	069	SP	ピット	SC10m	—	0.27	0.32		
Ⅱ区	070	SP	ピット	SC10m	0.35	0.28	0.39		
Ⅱ区	071	SP	ピット	SC10m	—	0.26	0.05		
Ⅱ区	072	SP	ピット	SC9m	0.27	0.27	0.60		
Ⅱ区	073	SP	ピット	SC9n	0.23	0.19	0.17		
Ⅱ区	074	SP	ピット	SC9n	0.32	0.24	0.16		
Ⅱ区	075	SP	ピット	SC9n	0.25	0.25	0.26		
Ⅱ区	076	SP	ピット	SC9n	0.30	0.27	0.38		
Ⅱ区	077	SP	ピット	SC9n	0.30	0.30	0.46		
Ⅱ区	078	SP	ピット	SC9m	0.53	0.32	0.42		
Ⅱ区	079	SP	ピット	SC9m	0.34	0.30	0.53	山形層 (No.9.10)	
Ⅱ区	080	SP	ピット	SC9l - SC9n	0.38	0.27	0.35		
Ⅱ区	081	SP	ピット	SC9n	0.36	0.30	0.48		
Ⅱ区	082	SP	ピット	SC9n	0.14	0.14	0.14		
Ⅱ区	083	SP	ピット	SC9m	0.24	0.24	0.19		
Ⅱ区	084	SP	ピット	SC9n - SC9m	0.35	0.26	0.31	山形層 (No.11.IZ) 山頂 (No.20)	
Ⅱ区	085	SP	ピット	SC9m	0.25	—	0.29		
Ⅱ区	086	SP	ピット	SC9m	0.25	0.23	0.25		
Ⅱ区	087	SP	ピット	SC9n	0.40	0.30	0.12		
Ⅱ区	088	SP	ピット	SC9n - SC9m	0.44	0.44	0.39		
Ⅱ区	089	SP	ピット	SC9n - SC10n	0.87	0.64	0.66		
Ⅱ区	090	SP	ピット	SC9n	0.41	0.31	0.56		
Ⅱ区	091	SP	ピット	SC10m	0.33	0.26	0.08		
Ⅱ区	092	SP	ピット	SC10m	0.48	0.42	0.36		
Ⅱ区	093	SP	ピット	SC10m	—	—	0.15	山頂 (No.19)	
Ⅱ区	094	SP	ピット	SC10m	0.35	0.27	0.20		

造構一覧表

調査区 番号	造構 番号	造構名	性格	グリッド	高さ (m)			出土遺物	備考
					前輪	中輪	後輪		
II 区	095	SP	ピット	SC9i	0.32	0.26	0.45	山岳 (No.16)	
II 区	096	SP	ピット	SC9i	—	0.17	0.08		
II 区	097	SP	ピット	SC9im	0.35	0.30	0.18		
II 区	098	SP	ピット	SC9im	—	0.30	0.14		
II 区	099	SP	ピット	SC9i	0.36	0.36	0.10		
II 区	100	SP	ピット	SC9i	0.26	0.25	0.37	山系鏡 (No.14) 丸瓦 (No.28)	
II 区	101	SP	ピット	SC10im	—	—	0.22	斎度鏡 (No.25)	
II 区	102	SP	ピット	SC9im・SC9im・ SC10im・SC10im	1.47	0.77	0.78		後岩壁あり
II 区	103-A	SP	ピット	SC10im・SC10im	0.56	0.30	0.32		後取廻あり 2基あり
II 区	103-B	SP	ピット	SC10im・SC10im	0.41	0.24	0.28		2基あり
II 区	104	SP	ピット	SC9im	0.22	0.20	0.09	短鏡 (No.23)	
II 区	105	SP	ピット	SC10i・SC10im	0.40	0.35	0.62		
II 区	106	SP	ピット	SC9i	0.25	0.18	0.33	山系鏡 (No.13)	
II 区	107	SP	ピット	SC10i	0.30	0.24	0.22		
II 区	108	SP	ピット	SC10i	0.28	0.27	0.37		
II 区	109	SP	ピット	SC9im	0.40	0.32	0.40		後取廻あり
II 区	110	SP	ピット	SC9i・SC10i	0.32	0.31	0.66		
II 区	111	SP	ピット	SC10im	—	0.74	0.17		
II 区	112	SP	ピット	SC10i	0.25	0.20	0.39		
II 区	113	SP	ピット	SC10i	0.23	0.19	0.06		
II 区	114	SP	ピット	SC10im	0.53	0.40	0.21		
II 区	115	SP	ピット	SC10im	—	0.20	0.33		
II 区	116	SP	ピット	SC10i	0.36	—	0.28	山岳 (No.21)	
II 区	117	SP	ピット	SC10n	0.56	0.47	0.18		後取廻あり
II 区	118	SP	ピット	SC10im	0.15	0.13	0.17		
II 区	119	SP	ピット	SC10im	0.52	0.44	0.43		
II 区	120	SP	ピット	SC9im・SC10im	0.87	0.57	0.31		後取廻あり
II 区	121	SP	ピット	SC9im	0.33	0.30	0.16		
II 区	122	SP	ピット	SC9im	—	0.27	0.23		
II 区	123	SP	ピット	SC9i	—	—	0.07		
II 区	124	SP	ピット	SC10im	0.27	0.22	0.12		
II 区	125	SP	ピット	SC10im・SC10im	1.97	0.75	0.13		
II 区	126	SP	ピット	SC10im	0.30	0.28	0.22		
II 区	127	SP	ピット	SC10i・SC10im	0.37	0.34	0.33		
II 区	128-A	SP	ピット	SC10i	0.47	0.30	0.33		ピット3基あり
II 区	128-B	SP	ピット	SC10i	0.35	0.30	0.25		ピット3基あり
II 区	128-C	SP	ピット	SC10i	—	0.40	0.17		ピット3基あり
II 区	129	SP	ピット	SC10i	0.39	0.19	0.14		
II 区	130	SP	ピット	SC10i	0.17	0.17	0.13		
II 区	131	SP	ピット	SC10i	0.22	0.22	0.17		
II 区	132	SP	ピット	SC10i	0.43	0.37	0.31		
II 区	133	SP	ピット	SC10i	0.53	—	0.09		
II 区	134	SP	ピット	SC10i	0.48	—	0.03		
II 区	135	SP	ピット	SC9im	0.20	0.14	0.12		
II 区	136	SP	ピット	SC9im	0.20	0.17	0.13		
II 区	137	SP	ピット	SC9im	0.34	0.30	0.44		
II 区	138	SP	ピット	SC9im	0.20	0.17	0.14		
II 区	139	SP	ピット	SC9im	0.44	0.44	0.59		

遺構一覧表

調査区 番号	遺構 番号	遺構名	性質	グリッド	基盤 (m)			出土遺物	備考
					基盤	埋輪	溝き		
Ⅱ区	140-A	SP	ピット	SC9m	0.73	0.40	0.63		
Ⅱ区	140-B	SP	ピット	SC9m	0.80	—	0.30		ピット A・B の 2 基あり
Ⅱ区	141	SP	ピット	SC9i・SC9m	—	0.41	0.50		ピット A・B の 2 基あり
Ⅱ区	142	SP	ピット	SC9m	—	0.25	0.18		
Ⅱ区	143	SP	ピット	SC9i・SC9l	0.45	—	0.16		
Ⅱ区	144	SP	ピット	SC10m	0.27	0.25	0.29		
Ⅱ区	145	SP	ピット	SC10m	0.27	0.27	0.20		
Ⅱ区	146	SP	ピット	SC10m・SC10n	0.38	0.30	0.46		
Ⅱ区	147	SP	ピット	SC10m	—	0.25	0.23		
Ⅱ区	148	SP	ピット	SC10m	—	0.23	0.14		
Ⅱ区	149	SP	ピット	SC10i	0.56	0.51	0.37		後取痕あり
Ⅱ区	150	SP	ピット	SC10n	0.50	0.42	0.49	山陰 (No.22) 白磁碗 (No.29)	
Ⅱ区	151	SP	ピット	SC10n	0.43	0.37	0.54		
Ⅱ区	152	SP	ピット	SC9i	—	—	0.28		
Ⅱ区	153	SP	ピット	SC9m	—	0.18	0.12		
Ⅱ区	154	SP	ピット	SC10i	0.25	0.25	0.12		
Ⅱ区	155	SP	ピット	SC10n	0.17	0.17	0.13		
Ⅱ区	156	SP	ピット	SC10n	0.26	0.24	0.16		
Ⅱ区	157	SP	ピット	SC9i	0.20	—	0.18		

遺物観察表

遺物 番号	遺物取上 者番号	調査 区番号	グリッド	層位 地質	地質 封入物	既往 検査率	口径 (cm)	高さ (cm)	直径 (cm)	内面	外面	触土	色調	時期	備考	
1	008	I 区	001SP	常滑	広口壺	1/10	-	-	(11.0)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	2SYB/I	中世 常滑 6型式		
2	014	I 区	SC10m	椚出	滑石	1/10	-	-	-	研磨	研磨	滑石製	7SYR6/I	中世 滑石器部		
3	048	II 区	SC9m	028SX	常滑	山茶瓶	4/10	(15.3)	4.8	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	10YRB/3	中世 常滑 5型式	
4	049a	II 区	SC10m	028SX	常滑	山茶瓶	2/10	-	-	7.2	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYT/I	中世 常滑 5型式	
5	049b	II 区	SC10m	028SX	常滑	山茶瓶	1/10	-	-	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	触土	10YRB/1	中世 常滑 5型式	
6	057a	II 区	036SP	常滑	山茶瓶	3/10	-	-	(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	10YRB/1	中世 常滑 5型式		
7	057b	II 区	036SP	常滑?	山茶瓶	1/10	-	-	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	2SYB/2	中世 常滑 6型式		
8	101	II 区	029SP	常滑	山茶瓶	5/10	(15.2)	5.1	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYB/I	中世 常滑 5型式・内面漆付壺・使用痕・底部削除圧痕		
9	109a	II 区	079SP	常滑	山茶瓶	3/10	-	-	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYT/2	中世 常滑 4型式		
10	109b	II 区	079SP	常滑	山茶瓶	2/10	-	-	(9.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	10YRB/2	中世 常滑 4型式		
11	112a	II 区	084SP	常滑	山茶瓶	3/10	(15.8)	5.0	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYB/I	中世 常滑 5型式・内面使用痕・底部削除圧痕		
12	112b	II 区	084SP	常滑	山茶瓶	2/10	-	-	(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYT/I	中世 常滑 5型式・底部削除圧痕		
13	121	II 区	106SP	常滑	山茶瓶	1/10	-	-	(7.8)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	10YR7/3	中世 常滑 4型式・底部削除圧痕		
14	136a	II 区	100SP	常滑	山茶瓶	4/10	-	-	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYB/2	中世 常滑 4型式・焼成不良・全体黒化・底部削除圧痕		
15	030	II 区	SC9m	常滑	山茶瓶	3/10	-	-	2.9	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ ナデ	触土	2SYB/I	中世 常滑 5型式・底部削除圧痕	
16	032b	II 区	SC10i	常滑	山茶瓶	3/10	(14.6)	5.1	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ ナデ	触土	10YRB/1	中世 常滑 6型式		
17	057c	II 区	036SP	常滑?	山茶	4/10	(8.0)	2.3	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ 自然施多い	触土	10YRB/1	中世 常滑 6型式		
18	084	II 区	095SP	常滑	山茶	4/10	(8.0)	3.0	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	2SYB/I	中世 常滑 5型式		
19	093	II 区	028SX	常滑	山茶	9/10	8.2	1.8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYB/I	中世 常滑 4型式・自然施		
20	095	II 区	028SX	常滑?	山茶	4/10	(8.2)	2.0	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	10YRB/1	中世 常滑 5型式供行用器		
21	098	II 区	093SP	常滑	山茶(肩 付?)	8/10	7.8~ 8.4	1.7~ 2.5	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	SY7/I	中世 12~13世紀		
22	112c	II 区	084SP	常滑	山茶	2/10	(7.7)	2.7	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	2SYB/I	中世 常滑 5型式・内面使用痕		
23	132	II 区	116SP	常滑	山茶	9/10	8.0	1.7~ 3.4	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	10YR7/3	中世 常滑 5型式・茎み大		
24	133	II 区	150SP	常滑	山茶	5/10	(8.0)	2.5	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	10YRB/I	中世 常滑 5型式・内面使用痕		
25	040	II 区	SC9m	常滑	小瓶	2/10	(9.2)	2.6	(4.8)	ロクロナデ	(ロクロナデ) 自然施	触土	10YRB/2	中世 常滑 4型式		
26	033	II 区	SC10m	常滑	山茶	4/10	-	-	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	10YR7/3	中世 常滑 5型式		
27	035a	II 区	SC10m	常滑	山茶	9/10	8.1	2.3	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	10YRB/1	中世 常滑 5型式		
28	039	II 区	SC9m	常滑	山茶	7/10	9.0	2.3	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ ユビナデ	触土	10YRB/2	中世 常滑 5型式		
29	051b	II 区	SC10m	常滑	山茶	4/10	(7.1)	2.0	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然施	触土	10YRB/1	中世 常滑 6型式		
30	119	II 区	104SP	常滑	短筒瓶	1/10	(14.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 輪縁	触土	10YRB/1	中世 12世紀		
31	044	II 区	027SP	常滑	葉	1/10	-	-	-	ケズリ ナデ	ナデ タキ	触土	SYR5/3	中世 15世紀		
32	086	II 区	101SP	常滑	葉	3/10 以下	-	-	x	既往 タキ	既往 タキ	触土	10R2/1	中世 常滑 2型式		
33	097	II 区	028SX	常滑	葉	1/10 以上	-	-	-	タキ 既往 ナデ	タキ 既往 ナデ	触土	10YR5/2	中世 常滑 2型式		
34	039b	II 区	SC10m	常滑	葉	3/10 以上	下	-	-	既往 タキ	既往 タキ	触土	10R2/1	中世 常滑 2型式		
35	046	II 区	027SP	常滑(底 地盤)	丸瓦	2/10	-	-	-	タキ	タキ	触土	2SYB/I	中世 12世紀		
36	136b	II 区	100SP	常滑(底 地盤)	丸瓦	2/10	-	-	-	ハラケズリ タキ	タキ 自然施	触土	2SYT/1	中世 12世紀		
37	032a	II 区	SC10i	常滑	三重巻	1/10	-	-	(8.5)	ハラケズリ	ユビナデ	触土	7SYR7/3	中世 常滑 5型式		
38	051a	II 区	SC10m	伊勢	伊勢型鏡	1/10	-	-	x	指輪鏡 ナデ	ナデ	触土	10YRB/3	中世 13世紀・口縁部漆付		
39	151	II 区	150SP	常滑(青 磁)	白磁	1/10	-	-	-	ロクロ	ロクロ	触土	10YRB/1	中世 12世紀?		
40	020	II 区	SC9m	椚出	白磁(青 磁)	-	-	-	-	ロクロケズリ	ロクロ	触土	SY7/2	中世 13世紀?		
41	063	II 区	040SP	常滑?	陶丸	10/10	φ 19	-	-	ナデ 研磨?	-	触土	2SYB/1	中世 13世紀		

写 真 図 版



I区 完掘全景 南西から



I区 完掘全景 北西から

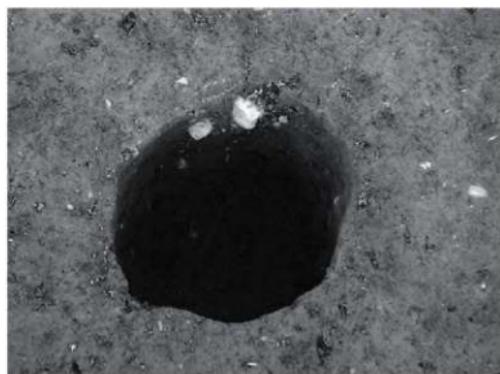


I区 北壁断面 南東から

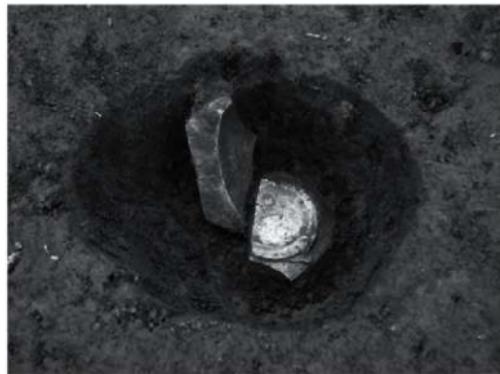
写真図版第 2



東TR 断面状況（西面）南東から



001SP 完掘状況 南から



001SP 遺物出土状況 № 002・003 東から



027SD 断面状況 南から



027SD d006 出土状況 北から



028SX 断面状況 南から

写真図版第 4



088SP 断面状況 南から



047SP 遺物出土状況 東から



050SP 遺物出土状況 東から



116SP 遺物出土状況 西から



150SP 遺物出土状況 d019 北から



I区 建物跡 完掘状況 東から

写真図版第 6



II区 完掘状況 北から



II区 完掘状況 南東から



II区 完掘状況 南から



II区 南壁断面状況 北西から

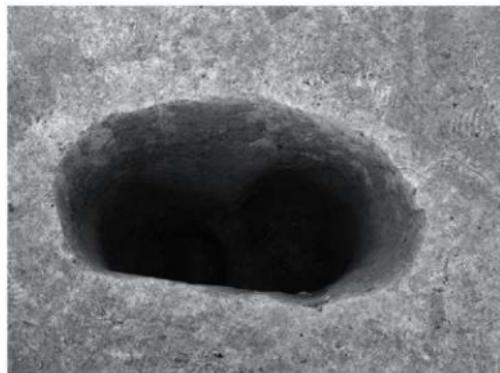


040SK 完掘状況 東から

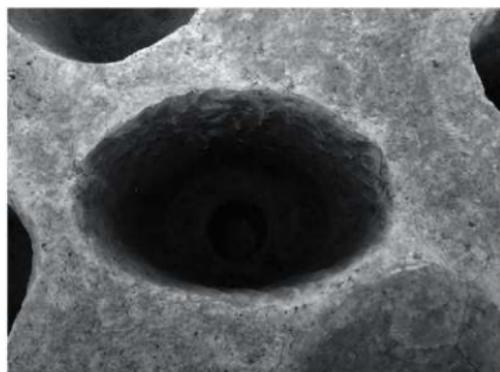


102SP 完掘状況 東から

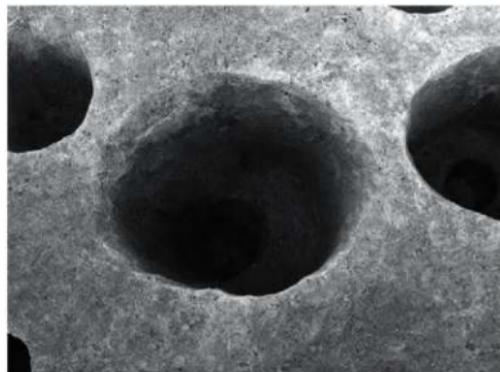
写真図版第 8



036SP 完掘状況 南から



046SP 完掘状況 南から



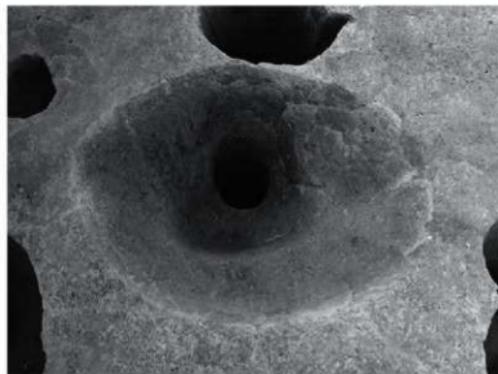
047SP 完掘状況 南から



150・151SP 完掘状況 南から



120SP 完掘状況 南から



089SP 完掘状況 東から

写真図版第 10



087・088・152SP 完掘状況 東から



1 001SP 出土 広口壺 (1)



2 包含層出土 石鍋 (2)



3 028SX 出土 山茶碗 (4)



4 079SP 出土 山茶碗 (9)



5 084SP 出土 山茶碗 (12)



6 106SP 出土 山茶碗 (13)

写真図版第 12

※ () 内は遺物番号を示す



7 遺構外出土 山茶碗 (15)



8 036SP 出土 山皿 (17)



9 095SP 出土 山皿 (18)



10 028SX 出土 山皿 (19)



11 028SX 出土 山皿 (20)



12 093SP 出土 山皿(耳皿?) (21)

※ () 内は遺物番号を示す



13 116SP 出土 山皿 (23)



14 150SP 出土 山皿 (24)



15 遺構外出土 山皿 (26)



16 遺構外出土 山皿 (27)



17 遺構外出土 山皿 (28)



18 104SP 出土 短頸壺 (30)

写真図版第 14

※ () 内は遺物番号を示す



19 027SD 底面出土 瓢 (31)



20 100SP 出土 丸瓦 (36)



21 遺構外出土 伊勢型鍋 (38)



22 150SP 出土 白磁碗 (39)



23 遺構外出土 不明 (青磁) (40)

報告書抄録

ふりがな	きたひろいせきはつくつちようさほうこく						
書名	北広遺跡発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	宮澤浩司						
編集機関	国際文化財株式会社 中部支店						
所在地	〒451-0045 愛知県名古屋市西区名駅2-27-8 Tel 052-414-6801						
発行機関	愛知県東海市教育委員会						
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 Tel 052-603-2211						
発行年月日	2019年(平成31年)3月29日						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
キタヒロイセキ 北広遺跡	アイチケン レウカビン フキシママツ 愛知県東海市富木島町	23222	43060	35 0 13 136 90 62	20180118～20180219	270m ²	範囲確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北広遺跡	遺物散布地	中世	住居跡	常滑(知多)窯産 陶器	中世掘立柱建物跡		

愛知県東海市
北広遺跡発掘調査報告

平成31年（2019年）3月29日印刷
平成31年（2019年）3月29日発行

編 集 国際文化財株式会社 中部支店
〒451-0045 愛知県名古屋市西区名駅2-27-8
TEL 052-414-6801

発 行 愛知県東海市教育委員会
〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地
TEL 052-603-2211・0562-33-1111（代表）

印刷・製本 株式会社 愛知印刷工業
〒476-0002 愛知県東海市名和町2番割下52-1
TEL 052-601-4511
